

目次	ベトナム仏教研究の意義と展望	1
	2014(平成26)年度「特定・指定研究」研究経過報告	2
	2015(平成27)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(廃止・変更・追加)	8
	2014(平成26)年度「一般研究」研究成果概要	10
	海外学会参加報告	25
	海外研究調査報告	28
	国内研究調査報告	31
	公開講演会・公開研究会	35
	学術交流協定に基づく共同研究	39
	ソルティム・ケサン(白館戒婁)先生全集出版記念報告	41
	彙報	42

## ベトナム仏教研究の意義と展望

ベトナム仏教研究 研究代表者・教授 織田 顕祐

「ベトナム仏教研究」は、2014年10月に正式に立ち上げられた、最も新しい指定研究である。その中心的な課題は、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院と協同して、ベトナムにおける仏教受容の歴史と実態を明らかにし、同時にベトナムにおける仏教研究、東アジア・東南アジア研究の方法論を順次科学的なものにしていくのに資することである。

御承知のように、ベトナムはインドと中国の間、いわゆるインドシナ半島の東側に位置する。従って仏教をはじめとするインドの文化・文物はかなり早くから伝来していたようである。既に紀元前後頃にインドから僧侶がやって来たとする伝説が残っているほどであるから、我が国よりずっと早く、ことによると中国よりも早く仏教を受け入れていたかもしれない。現在でもベトナム僧が読誦する大乘経典、例えば『阿弥陀經』等は、私たちが儀式の際に読誦する呉音の発音とかなりよく似ている。我々が初めて宗教研究院を訪問した時(2012年3月)、請われて日本式の読経を携帯端末で提示したところ、若いベトナム人研究者たちは大層驚いていた。彼らには日本式の発音がある程度分かるのだ。そしてその発音が漢字に対応していることを知った時、彼らの驚きは一層大きなものであった。現在ベトナムではほとんど漢字は使われていないからである。ベトナムはそれほど深く漢字文化圏に属しながら、これまでの様々な事情によって自国の文化を研究するための方法を失ってしまったのである。

こうした背景の中で、2013年12月に真宗総合研究所とベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で「学術交流に関する協定書」が結ばれ、本研究班が立ち上げられた。当面の課題は、お互いの仏教受容の歴史と実態を大きく把握することである。ベトナムでは日本が仏教国であることはよく知られている。しかし現状では、ベトナムの人々が日本の仏教や東アジアの文化・歴史を研究しようとする時、手にすることができる先行研究はすべて欧米人の著作に限られている。それ故、その記述が信頼に足るものであるか否か

不明のまま、それらによるほかないのだそうである。この点は、我が国においてもほぼ同様で、現在ベトナム仏教の概要を知ろうとしても参考になるようなものはほとんど存在しない。また、ベトナムは社会主義の国であり、学術活動なども政府の許可が必要で、人文科学系の学会を組織することなどは特に困難のようである。それゆえ、学問的な業績は独りよがりになりがちで、基本文献の提示や論述の方法などもまちまちであり、個々の努力や業績が全体の力にならないような構造となっている。留学生なども、人文科学の分野では優秀な人ほど帰国しないとのことである。このようなわけであるから、永く、かつ質の高い人文学研究の実績を持つ本学が協力できることは極めて多い。そのためには相当の時間と多くの人材と経費が必要であるが、腰を据えて力を合わせていかなければならないのである。

研究班では、2014年3月、2015年3月とまだ二回だけであるが、ベトナム北部の主要な仏教寺院をいくつか現地調査した。そこでは、極めて複雑なベトナム仏教寺院の本堂内部の荘厳や、俗人と僧侶が渾然一体となった寺院内の生活ぶり、そこに残されている書物や、出版文化の形跡など、日本の仏教とはおよそ異なるベトナム仏教の実態を確認することができた。このような相違は、これから現地調査を重ねることによって、さらに幾つもの点が明らかになるであろう。かなりむかし、同じように仏教という文明を受け入れながら、一体どのような理由によってこのように異なっているのか。こうした点の解明は、これまで全く知られなかった日本仏教の特質を考えなおす手がかりになるであろう。それはまた、ひいては東アジア・東南アジアにおける仏教受容の実態に関する新たな視点を提供することにも繋がるのである。このように、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との学術交流を通して、ベトナム仏教をよく知り、日本仏教を正しく知ってもらうことは互恵的な意味を持っているのである。

# 2014(平成26)年度「特定・指定研究」研究経過報告

## 教如上人研究

### 真宗大谷派・東本願寺開祖 である教如上人に関わる 史料の調査と研究

研究代表者・学長 草野 顕之  
(日本仏教史／真宗史)

本研究では、「真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究」を課題として調査・研究を進めている。

真宗大谷派・東本願寺開祖ともいべき位置にある教如上人(永禄元年=1558～慶長19年=1614)の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。

こうした意義を持つ本研究では、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的・目標としている。

具体的には、1. 教如上人授与物、2. 消息類、3. 聖教文言掛幅、4. 開板聖教(正信偈三帖和讃・御文など)、5. 言行を伝える覚書・日記類などの諸史料を調査・研究の対象とし、これまでに公刊されている史料集や図録類などからの収集を進めるとともに、寺院調査も行い、そこで得られた情報をデータベースとしてまとめ、画像データ、史料翻刻データなども蓄積している。2014年度の研究活動とその成果については以下のとおりである。

#### 〈研究会〉

2014年度は6回の研究会を開催した。はじめの2回は教如上人史料の調査研究を具体的にどのように進めていくのかについて、提案・検討がなされた。公刊されている史料集や図録類、新たに調査で得られたデータのいずれにおいても、①名称・年月日・差出・宛名・法量・備考などの基本項目を表計算ソフトに入力し、データベースを作成する。②史料ごとに、文字情報を翻刻。③画像のあるものはスキャニングしてデータ保存し、調査したものについてはデジタルカメラで撮影をして、画像データを整理・保存するという方針が決

定され、その方向で調査・研究を進めて行くこととなった。第3回の研究会以降は、作業によって蓄積されたデータベース、翻刻データなどをもとに、研究員・嘱託研究員による研究成果の報告・検討が行われた。特に、調査に赴いて得られた成果については、新たな発見があるなど、教如上人研究の持つ可能性が確認された。

#### 〈調査〉

2014年度は、5回の史料調査を実施した。第1回目は善重寺(岐阜県揖斐川町)所蔵の教如上人寿像調査で、教如上人自筆の銘や讃文を確認することができた。

また、複数回赴いた浄泉寺(京都市中京区)の調査でも、教如上人寿像の調査作成、撮影を行うとともに、寺院成立にまつわる由緒書などの調査・撮影を行った。

年度末の3月には、教如上人とゆかりの深い光徳寺(滋賀県大津市)でも調査を実施した。ここではまだ東本願寺が成立する以前、教如上人が公的には隠居中であった慶長7年(1602)に授与した寿像や由緒書など、教如上人にまつわる数多くの法宝物を調査することができた。

なお、浄泉寺・光徳寺の調査成果については、『真宗大谷派浄泉寺の歴史と法宝物』、『朝陽山光徳寺の歴史と法宝物』と題する調査報告書にまとめた。

## 清沢満之研究

### 清沢満之の生涯と思想の研究を 更に進め、その成果を『清沢満之 全集』の補遺として、発刊する

研究代表者・准教授 藤原 正寿  
(真宗学)

2014年度に発足した本研究班は、本学・学祖である清沢満之の生涯と思想に関する研究調査を行い、その成果をすでに刊行されている大谷大学編『清沢満之全集』(岩波書店)を補完する史料として公にすることを目的とするものである。本年度は、①2003年度まで活動し、『清沢満之全集』(岩波書店)を編纂した清沢満之研究班(以下:旧研究班)の資料の収集・整理、

②関根仁應宛の清沢満之書簡及び清沢満之講義ノート(長徳寺蔵)の調査収集・翻刻の二点を柱として研究を行った。

まず、①旧研究班の資料の収集・整理について、旧研究班の活動終了後は大谷大学史資料室に移行・保管されていたデータを引継ぎ、そのデータの本研究班での情報共有、補遺出版に向けての問題点の確認等のため、12月1日(月)に研究会を開催した。この研究会は旧研究班にも携わっていた西本研究員による発表形式で行われ、大谷大学編『清沢満之全集』発刊の経緯の確認、未掲載資料の確認、底本・依拠本の再確認等を行った。そして、研究会で検討された事項を参考に、分散していたデータの整理や確認を現在も継続的に行っている。

また、②長徳寺蔵資料の調査収集・翻刻について、6月27日(金)から28日(土)、7月11日(金)から13日(日)の二度にわたって新潟県新発田市の長徳寺に保管されている関根仁應宛の清沢満之書簡及び清沢満之講義ノートを、『関根仁應日誌』の刊行の際にすでにこれら資料を整理していた真宗大谷派教学研究所の協力の下、整理・資料撮影を行った。この際、本研究班では講義録である「哲学史」、「近代史」、「今世哲学史」、「倫理学史」、「近世倫理学史」の五点の撮影を行った。その後、これらの資料は二名の研究補助者によって翻刻作業を行った。この翻刻作業は現在終了し、一次校正を行っている。なお、書簡の撮影は教学研究所がすでに行っているため、長徳寺、教学研究所との協議の上、公にする方法を探っていく予定である。

その他、本年度は求道会館所蔵の近角常観宛の清沢満之書簡の確認、親鸞仏教センター主催の研究交流会への出席、随時ミーティングを開催する等、補完史料の公開に向けて上記の二点以外の研究活動も適宜行った。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・准教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とする宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。地域・言語別に英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の三班に分かれて研究活動を進めた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

《英米班》

#### I. 翻訳研究活動

##### (1) 『浄土の真宗』『宗門の歩み』英訳出版への協力

阿満道尋囑託研究員(アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授)を中心に、真宗大谷派北米開教区真宗センター(Shinshū Center of America)から出版予定の大谷派教師課程教科書『浄土の真宗』『宗門の歩み』英語版について、前年度に引き続き編集校正作業に協力した。

##### (2) 次期翻訳研究プロジェクトの計画

次期翻訳研究プロジェクトとして中長期的に英訳研究に取り組むべきテキスト選定を進めたが、最終的な翻訳テキストの決定は2015年度に持ち越すことになった。

#### II. 国際学会・シンポジウム関係

##### (1) 国際学会への参加・研究発表

###### ① 第17回 国際仏教学会(IABS)大会

8月18日(月)～23日(土)の6日間、オーストリアのウィーン大学で開催された国際仏教学会大会にロバート・F・ローズ研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ囑託研究員が参加し、研究発表を行った。(詳細は『所報』65号所収のローズ研究員による報告を参照)。

###### ② 第14回 ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)国際会議

8月27日(水)～30日(土)の4日間、スロヴェニアのリュブリャナ大学で開催されたEAJS国際会議にロバート・F・ローズ研究員、井上尚実研究員、マイ

ケル・コンウェイ嘱託研究員、阿満道尋嘱託研究員が参加し、宗教教会において大谷大学パネル「20世紀における親鸞像：真宗教団の内側と外側からの視座」“Images of Shinran in Twentieth Century Japan: Perspectives from Inside and Outside the Shin Denomination”の発表を行った。(詳細は『所報』65号所収報告を参照)。

③ アメリカ宗教学会 (AAR) 2014年大会

11月22日(土)～25日(火)の4日間、カリフォルニア州サンディエゴで開催された年次大会にマイケル・コンウェイ嘱託研究員が参加して仏教研究の動向について情報を収集し、研究者と交流を深めた。

(2) シンポジウム開催の準備

① *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*出版記念シンポジウム

2015年6月26日(金)・27日(土)の2日間、大谷大学メディアホールを会場に開催される近代教学アンソロジー英訳出版記念シンポジウムの準備を進めた。

② エトヴェシ・ロラード大学(ELTE)と共催の国際仏教シンポジウム

2016年度に予定されているELTEと共催の第2回シンポジウムの計画を進めた。「仏陀の言葉の解釈」テーマに、5月中の2日間開催する方向で具体的な検討に入った。

III. 公開講演会の開催

2014年度は、以下のような公開講演会を開催した。(会場はいずれも本学響流館マルチメディア演習室)

(1) 2014年6月24日(火)16:20～17:50

講師：Justin McDaniel ジャスティン・マクダニエル氏 (ペンシルバニア大学准教授)

講題：“Recent Investigations into Thai Manuscripts held in Western Collections”

「欧米に所蔵されるタイ写本に関する最近の調査研究」

(2) 2014年10月31日(金)16:20～17:50

講師：Aaron A. Proffitt アーロン・A・プロフィット氏 (ミシガン大学 Ph. D. Candidate)

講題：中世仏教における「秘密念仏思想」：阿闍梨道範と密教浄土教文化 (日本語による講演)

(3) 2014年11月14日(金)16:20～17:50

講師：Jessica L. Main ジェシカ・L・メイン氏 (ブリティッシュ・コロンビア大学准教授)

講題：Ōtani Sukauto and Honganji Sukauto: The Religious Life of Semi-Autonomous

and Sectarian Shin Buddhist Scouting Movements 「大谷スカウトと本願寺スカウト：浄土真宗スカウト運動における半自治的、宗派的な宗教生活」

IV. その他

本研究が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、前年度に引き続き、研究所所蔵の欧文仏教雑誌とデータ・ベースを照合し、欠本や図書館で継続購入している雑誌との重複などについて整理する作業を進めた。

《ドイツ・フランス班》

I. シンポジウムの論文化 (刊行)

2010年にフランス国立高等研究院においておこなわれたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」で発表した原稿を刊行する準備が進んでいる。近日、フランスの出版社Brepolsから出版される予定である。

II. 翻訳

マールブルク大学D・コルシュ教授の『マルティン・ルター入門』の訳文の検討を継続して行っている。

《東アジア班》

中国社会科学院歴史研究所とは2010年に学術交流協定を締結し、共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」をテーマとして研究活動を推進してきた。2014年度も相互に研究者を派遣して共同研究を行い、学術交流を深めた。また、2014年度は協定の最終年度に当たるため、本学からの派遣の際に中国社会科学院歴史研究所にて協定の延長を行った。

① 2014年11月17日(月)～11月18日(火)、中国社会科学院歴史研究所より王啓發研究員・朱昌榮副研究員・雷聞研究員の3名を招聘し、本学にて研究活動を行うとともに、公開研究会を開催した。講師と講題は下記の通りである。

11月18日(火)13:00～15:00

於マルチメディア演習室 (響流館3階)

王啓發 「『牟子理惑論』中に見える老子」

朱昌榮 「程朱理学と清初の社会再建」

雷聞 「太清宮道士呉善経と中唐長安道教」

② 2015年1月24日(土)～1月28日(水)、松川節教授 (真宗総合研究所長)、松浦典弘准教授 (国際仏教研究研

究員)、村岡倫龍谷大学教授が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、下記の講題にて研究発表を行った。研究会開催に先立ち、松川真宗総合研究所長とト憲群中国社会科学院歴史研究所所長との間で交流協定の更新(2015年度より5年間)が行われた。

1月27日(火) 9:00～11:00

於中国社会科学院歴史研究所

松浦典弘「新出の唐代尼僧墓誌について」

村岡倫「大谷探検隊の記録から見る20世紀初頭のエルデネゾー寺院」

松川節「モンゴル仏典研究の現状と展望」

## 西藏文献研究

# チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

### 西藏文献研究班

本研究班は、2014年度は10月1日から3月31日まで休班となったため、4月1日から9月30日までの経過を以下に報告する。

#### 1.チベット語文献の電子テキスト化

シェラプジンパ(17世紀後半)の『中観学説決択』(大谷蔵外No.13949-13954)について、電子テキスト化の校訂・編集作業を進め、第一章冒頭部分を完了した。

『サンブ寺史(明鏡史)』(大谷蔵外No.13981)に関して、西沢史仁(嘱託研究員)が校訂テキストの再検討と編集作業を実施した。

#### 2.パーリ語貝葉写本のデジタル化

清水洋平・舟橋智哉(ともに嘱託研究員)により、前年度3月に実施した稀観写本調査(於バンコク:ワット・ポー)の結果をもとに、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本(大谷貝葉)の稀観文献の抽出作業を行った。

また、タイ王国文化省芸術局と九州国立博物館が主導する日タイ学术交流に係るタイ関係文化財調査への協力を行うため、大谷貝葉の元梱包布地を中心としたデジタルデータの整理を行った。上記した文化財調査メンバーが来学した折(6月14日)、清水洋平がその

デジタルデータをもとに対応し、調査協力を行った。

#### 3.寺本婉雅の日記の翻刻

宗林寺および村岡家より借用中の寺本婉雅関係資料のうち、『西藏探検日誌』在北京之部(2冊、1901～1902年にかけての日記)の第1冊目の翻刻を実施した。翻刻は、高本康子(嘱託研究員)が担当した。

#### 4.モンゴル国立大学との学術交流協定に伴う調査等

2013年にモンゴル国立大学社会学部(当時の名称、現在は総合科学学部と改称)との間で締結された学術交流協定に基づき、共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀～17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」活動を行った。2年目となる当年は、松川節所長と武田和哉(研究員)が参加して、U.エルデネバト氏(モンゴル国立大学社会学部考古学科教授)とともに、4月26日～5月1日の期間で実施した。

モンゴル国ヘンティ県所在のバルスホト I 遺跡所在の仏塔、同県都チンギスホト市内所在のグンドウガワルリン寺、セレンゲ県内所在のアマルバヤスガラント寺を訪問し、共同調査を実施した。バルスホト I 遺跡所在の仏塔については、ステレオ写真撮影を実施し、帰国後に立面図の図化を行った。また、調査の詳細については、武田が本研究所『所報』No.65に報告した。

続いて、6月22日～29日の日程で、同大学歴史学部長のP.デルゲルジャルガル氏(嘱託研究員)を本学にお招きし、共同研究を実施した。その際、本研究所にて公開講演会を開催した。詳細は下記の通りである。公開講演会日時・場所

6月25日(木) 16:30～18:00 響流館4階会議室

P.デルゲルジャルガル氏 「トルコ民族国家時代のモンゴル諸集団の出自と比定(紀元6～10世紀)」

## ベトナム仏教研究

# ベトナム社会科学アカデミー 宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授 織田 顕祐  
(仏教学)

本研究は、ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された協定に基づき推進する共同研究である。2014年度は主に『日本仏教概説』（仮称）の執筆とベトナム仏教寺院調査を行った。

2014年8月7日(木)には、『日本仏教概説』執筆のための連絡会を開催した。執筆において重視する視点と方向性について意見交換した。出席者は、織田顕祐(研究代表者)・箕浦暁雄(研究員)に加え、協力者のロバート F. ローズ・宮崎健司・平野寿則・福島栄寿の六名であった。川端泰幸とは後日別途意見交換を行った。

2014年9月18日(木)には、ベトナム仏教研究の方向性に関して包括的意見交換を行った。これまでの研究の現状について議論し、今後の方針について種々の提案がなされた。出席者は、織田顕祐・浅見直一郎(研究員)・箕浦暁雄・桃木至朗(大阪大学大学院教授)・福島重(龍谷大学研究員)の五名であった。

2015年3月12日(木)～3月17日(火)の間、織田顕祐と箕浦暁雄は、現地調査のため訪越した。まず、ハノイのベトナム社会科学アカデミー宗教研究院にて、ベトナム・日本双方における「仏教概説」の進捗状況について議論した。その後、織田、箕浦、大西和彦(嘱託研究員)、グエン・ヒュー・スー(ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院研究員)の四名でバクザン省普陀寺とハイズオン省安寧寺を調査した。とくに両寺院の歴史と当該寺院に保管される仏典の版本に関する聞き取り調査を行ったうえで、実際に閲覧・調査した。また、ハイズオン省青梅寺にある陳朝ベトナムの禪宗・竹林派第二祖の法螺禪師の碑「青梅円通塔碑」、ハイズオン省瓊林寺、ドーソン(塗山)市の祥龍塔寺をも視察・調査した。なお、祥龍塔寺にはベトナム最初期・李朝

時代のアショカ王塔(祥龍塔)建立伝承がある。塔跡に「李家第三帝龍瑞太平四年制」という年紀の入った煉瓦が散乱しており、その事実を確認するなどした。また、今回の訪越では、タンロン大学日本語学科を訪問した。さらに、織田と大西はハノイ人文社会科学大学でフィー(潘梨輝)先生と懇談した。ベトナムにおける学問の現状と今後の学術振興のための情報収集・意見交換を行うことができた。

## 大谷大学史資料室

# 大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 松浦 典弘  
(東洋史学)

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の収集、整理・保存、公開である。

収集の面では、図書館に保存されない大学発行の刊行物を将来に伝えていくシステムを構築するために、大学発行の刊行物及びパンフレット等の調査を学内の全部署に対して行った。その結果を受けて、散逸する恐れのあるノベルティ等を継続的に保存していくための提言をした。

整理・保存の面では、昨年度から引き続き、武田武磨先生(元大谷大学教授)から寄贈された資料の整理と目録のチェック作業を行っており、21箱中6箱まで終了した。また、当資料室所蔵のフィルム資料については、経年劣化を防ぐために、未整理フィルムのデジタルデータ化を進めるとともに、デジタルデータ化が終了した旧「学事史研究班」の撮影フィルムや『近代100年のあゆみ』のフィルム等の目録作成を行っている。

公開の面では、図書館1階エントランスを借りて、3回にわたって当資料室が所蔵している資料の展示を行った。1922年(大正11)に大学令による大学として設立が許可された時代にスポットを当てた『「大谷大学」誕生』展や、東京から京都へ移転開校した時にスポットを当てた「東京から京都へ～大谷大学の歴史をたどる～」、1913年(大正2)から現在にいたるまでのキャンパスの変遷を紹介した「大谷大学キャンパス

史～至誠館(旧図書館)・食堂編～」である。

その他には、尋源館が2013年に100周年を迎えたことを記念して、今の尋源館と旧本館(昔の尋源館)を3D回転画像とペーパークラフトで再現し、大学ホームページ上で公開した。今の尋源館と旧本館の両方を立体として作成することにより、比較できるようになった。さらに、大学史関係資料の保存・公開のノウハウを得るために、全国大学史資料協議会の全4回の研究会に参加し、また他大学の博物館へ見学に行った。

の内容を確認し、必要事項を記録する (b)。

- ②記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また精査に必要な情報を得るため、当該期東本願寺発行の機関誌『宗報』などによって、人事異動・布教所開設などに関する記事を整理しており、現在明治4～38年発行分までの作業が終了しているため、この作業を継続する (a)。
- ③作成された「史料一覧(原案)」と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする (b)。

## 東本願寺海外布教資料室

### 大谷大学図書館所蔵 「東本願寺旧蔵資料」 海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。この未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することを目的とする本資料室では昨年度に引き続き次のような活動を行っている。

資料には仮番号を付しており、合計165点ある。2014年度現在での作業は80番台をほぼ終えた。また地域を異にすることで作業が遅れていた北南米地域の資料50番台も後半に入っている。

この他、本資料整理の補助作業として、これら資料の記事と対比しての確認あるいは補足をするために『宗門開教年表』(真宗大谷派宗務所 1969) 所載の記事を基礎データとして入力し、さらに東本願寺の機関誌(『真宗』『宗報』など)の関係記事も抽出している。これについては明治・大正期を終了し、また昭和期も後半に至っている。

なお具体的な作業方法は下記の通りであり、史料の性質上、(a) 真宗総合研究所と (b) 図書館・博物館事務室との2カ所において行っている。

- ①事務書類綴りの状態になっている資料についてそ

## デジタル・アーカイブ資料室

### 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブ構築

室長・准教授 松浦 典弘  
(東洋史学)

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・アーカイブ化し、分類整理・保存する作業を引き続き進めていく。

2010年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2014年度には約2,230件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

また、本学の学内学会による様々な学術刊行物をデジタル化して公開する課題について、デジタル化自体については概ね合意を得ることができているため、今後鋭意進めていくことになるであろう。但し、公開に関しては、慎重な意見が多く、当面は非公開とする見込みである。

## 2015(平成27)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(廃止・変更・追加)

■ 指定研究「西蔵文献研究」嘱託研究員の追加

(2015年10月1日付)

研究名	研究課題及び研究組織
西蔵文献研究	<p>研究課題 チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化</p> <p>研究代表者 三宅伸一郎</p> <p>研究員 三宅伸一郎(准教授・チベット学) 武田和哉(准教授・人文情報学・歴史学・考古学) 藤田義孝(准教授・フランス文学)</p> <p>嘱託研究員 白館戒雲(本学名誉教授・特別研究員) U. Erdenebat(モンゴル国立大学社会科学部教授) 清水洋平(本学非常勤講師・特別研究員) 高本康子(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター学術研究員) 西沢史仁(特別研究員) 伴真一郎(博士後期課程修了)【追加】 舟橋智哉(博士後期課程修了)【追加】</p> <p>研究補助員(RA) LAMAO ZHUOMA(博士後期課程第3学年) (RA) ARILDII BURMAA(博士後期課程第1学年)</p>

■ 指定研究「国際仏教研究」嘱託研究員の追加

(2015年10月1日付)

研究名	研究課題及び研究組織
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開</p> <p>研究代表者 井上尚実</p> <p>研究員 井上尚実(准教授・真宗学) Robert F. Rhodes(教授・仏教学) Michael J. Conway(講師・真宗学) 藤枝真(准教授・宗教学・哲学) 井黒忍(講師・東洋史学)</p> <p>嘱託研究員 Michael Pye(マールブルク大学名誉教授) James C. Dobbins(オーバーリン大学教授) Mark L. Blum(カリフォルニア大学バークレー校教授) Paul Watt(早稲田大学留学センター教授) 羽田信生(毎田周一センター所長・本学非常勤講師) 阿満道尋(アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授) 赤尾栄慶(京都国立博物館名誉館員・本学客員研究員)【追加】</p> <p>研究補助員(RA) 梶哲也(博士後期課程第2学年) (RA) 味村考祐(博士後期課程第3学年) (RA) 尾崎俊文(博士後期課程第3学年)</p>



■ 所属機関変更に伴う一般研究班の廃止

(2015年7月31日付)

研究名	研究課題及び研究組織	
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（中井班）	研究課題 研究代表者	生業の域内多様度とその形成過程:東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較 中井信介（任期制助教・特別研究員）

■ 科研費採択に伴う一般研究班の発足

(2015年8月28日付)

研究名	研究課題及び研究組織	
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究（田鍋班）	研究課題 研究代表者	ハイデッガー「黒ノート」の研究——「計算的思考」の分析を中心に 田鍋良臣（任期制助教）
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究（藤原班）	研究課題 研究代表者	シュティフターとシュトルムの文学における「障がい児」像 藤原美沙（任期制助教）

# 2014(平成26)年度「一般研究」研究成果概要

## 共同研究

### 新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授 松川 節  
(モンゴル学)

本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トウラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究することを目的としており、三年目(最終年度)に当たる今年度は、13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究するために、現地における調査(2014年4月25日～4月29日、12月25日～12月31日、2015年2月15日～2月22日)を行い、その成果は、2014年9月6日・7日に現地で開催された国際シンポジウム及び2015年2月27日に大谷大学で開催された研究会にて報告され、カラコルムの仏閣「興元閣」は、オゴデイ・ハーンの宮殿址に建立されたのではなく、元々仏閣として建立されたものであり、オゴデイ・ハーンの宮殿址は、別の場所、おそらくは現在のエルデニゾー僧院内のどこかにあったであろうが、その場所は未だ特定できないという結論に至った。

上述の2014年9月6日・7日に現地で開催された国際シンポジウム「世界遺産「オルホン渓谷の文化的景観」の10年——過去と現在——」においては、本研究プロジェクト参加者(代表者:松川、研究員:三宅伸一郎、協同研究員:清水奈都紀)が報告を行い、仏教をキーワードにして浮かび上がるアジア史の新たな地平を追究するための課題を共有することができた。

以上の研究の成果として、『オルホン渓谷遺産』第3号(2015年1月、ウランバートル)と、英文とモンゴル文による国際シンポジウム論文集(2015年3月、ウランバートル)計2冊を刊行した。

## 共同研究

### モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進

研究代表者・教授 松川 節  
(モンゴル学)

本研究は、諸外国との国際的協働によってモンゴル国・カラコルム博物館収蔵の考古歴史遺物の研究を推進するとともに、同博物館の高度情報化をめざし、研究成果を情報展示によって地域に還元し、博物館を核とした地域振興策を新たに提案することを研究目的としており、初年度にあたる今年度は、1)歴史学分野で松川は2014年4月30日～5月6日までモンゴル調査を行い、カラコルム博物館に収蔵される『勅賜興元閣碑』のレプリカを制作するための基礎調査を行った。2)情報科学分野では研究協力者の平澤泰文(大谷大学)が2014年4月30日～5月6日までカラコルム博物館にて情報インフラ調査を行い、さらにiPadを利用したモンゴル語・日本語・英語博物館電子ガイドシステムの構築を行った。また帝塚山大学の山口欧志に依頼し、カラコルム博物館収蔵遺物の3Dデータ化について、基礎的調査・研究を行った。3)文化財保存科学分野で協同研究員の二神葉子は2014年9月5日～9月8日までカラコルム博物館に滞在し、文化財保存保護の方法について提言を行った。

これらの研究成果は、モンゴル国で2015年1月に刊行された雑誌『オルホン渓谷遺産』第3号に、二神葉子「これからの10年に向けてオルホン渓谷文化的景観の顕著な価値を共有するために必要な事柄について」(モンゴル文)、清水奈都紀「地域社会における文化遺産の新たな価値の発見と発信」(モンゴル文)として掲載され、モンゴルにおける現地還元が達成された。

初年度の研究計画のうち、1.歴史学分野でのポーランドおよびロシアにおける現地調査は、先方から資料閲覧の許可を得られていないため延期している。2.情報科学分野では「iPadカラコルム博物館電子ガイド」のプロトタイプを作成することができ、当初の計画以上に進展している。3.文化財保存科学分野では、

今年度はJICAによるカラコルム博物館派遣員の岡本真祐子、広橋弘子の協力を得て、二神が有効な保存策の提言を行うことができた。4. 地域振興分野においては、協同研究員の清水が2015年1月に現地調査を行い、その成果は2015年4月に現地で開催されるワークショップにて明らかにされる。

## 共同研究

### デジタルアーカイブ技術による 契丹国の歴史考古言語資料の 復原的研究と集成

研究代表者・准教授 武田 和哉  
(人文情報学)

本研究は、契丹国（遼朝）に関する新出現の遺跡・出土文字史料・文化財などを対象として、極力コストを抑えた手法を活用しつつ、研究資源として他の研究者も利用可能な客観的資料としてのアーカイブ化を行うことを目指すものであり、2014年度は研究班が発足して第2年目を迎えた。

本年度は、まず4月に本研究所において年度当初の打ち合わせ会議を実施した。次いで、8月には中国の北京人民大学および遼寧省・内蒙古自治区内各地の博物館・文物保管施設等を訪問して、対象となる文物などについての調査を実施したほか、同時に現地関係機関の関係者と意見交換などの交流を行った。さらに、1月には独立行政法人奈良文化財研究所および平城宮跡（奈良市）を会場として、研究成果報告の集会および特別史跡平城宮跡内の復原施設の見学を行い、外部の専門家や有識者らも招いて当該分野の最新の学術情報に関する研究検討会を行った。

以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

#### 1. 2014年度活動内容

4月19日(土)

研究班年度当初計画打ち合わせ会議（本研究所）

8月8日(金)～15日(金)

中国北京市（中国人民大学）・遼寧省（阜新市・朝陽市）・内蒙古自治区（赤峰市）訪問・調査

1月31日(土)～2月1日(日)

研究集会および平城宮跡内史跡復原施設等視察

（会場：独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂ほか）

報告者：町田吉隆氏・高橋学而氏（ともに協同研究員）ほか 司会進行・コメント：武田和哉ほか

#### 2. 2014年度研究成果物

『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第32号  
福井敏氏（協同研究員）「遼代出土誌文小考」  
(301-314頁)

なお、2015年度は本研究の最終年度であり、これまでの活動内容について総括と成果とりまとめ、およびデータベースの構築に向けての作業等を計画している。

## 共同研究

### アブラナ科植物の伝播・栽培・ 食文化史に関する領域融合的 研究

研究代表者・准教授 武田 和哉  
(人文情報学)

本研究は、東アジアの米主食文化では中心的副食として食されてきたアブラナ科植物（ハクサイ・カブ(B. rapa)、ダイコン(Rahpanus sativus)、キャベツ・ブロッコリー(B. oleracea)、カラシナ(B. juncea)、ワサビ(Wasabia japonica)等)について、いつ頃から日本列島に伝播・受容され、どのように栽培が広まったのか、またその栽培技法や食文化などの諸問題に関して、農学系・人文系の研究者の協業により実施するものである。歴史・考古学などの資史料や、品種の遺伝学的背景や成果等を融合させた総合的研究を目指しており、具体的には、日本やアジア各地において、関連する国際条約や国内法等に留意しつつ、さまざまなアブラナ科植物の葉・種子サンプル採取などを行い、遺伝学的見地から品種間の系譜関係を明らかにするとともに、各地における栽培形態・食用文化・利用方法や関係技術等も対象に含めて調査を行う予定にしている。

2014年度に採択されて発足し、行った主要な活動の概要としては、5月に仙台市内において研究分担者との打ち合わせ、6月に科研班関係者による山形市内で研究班発足にあたっての最初の打ち合わせ会議と視察見学会（山形県立博物館）を実施し、次いで8月には

中国陝西省を訪問し、当地にある西北農林科技大学の研究者と交流を行った後、青海・甘肅省内においてアブラナ科作物の作付・商品化・市場等の調査を実施した。また、11月には長野県内での調査を行い、2月に亀岡市内において2014年度の研究成果報告会議を開催し、3月には仙台市内においてセミナーを開催した。以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

5月16日(金)

科研採択に伴う研究班立ち上げ準備打ち合わせ  
(東北大学大学院生命科学研究科)

6月28日(土)～29日(日)

「アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究」研究班発足会議(山形市内および山形県立博物館)

7月12日(土)

研究班・文系研究者連絡会議  
(本研究所)

8月23日(土)～31日(日)

中国陝西省西安市(西北農林科技大学)・青海省(西寧市および近隣県)・甘肅省(張掖市・武威市・蘭州市)・北京市の訪問・調査

11月1日(土)～3日(月)

長野県内調査(穂高町・大町市・小布施町・飯山市・野沢温泉村のNPO法人・農業法人・博物館・郷土資料館・寺院・地域振興協会等の各種団体・施設の視察と聞き取り調査など)

2月23日(月)～24日(火)

2014年度研究成果総括会議(亀岡市内)

3月16日(月)～17日(火)

研究セミナー(東北大学大学院生命科学研究科)

フェノロサ(1853-1908)の講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。そのため、本研究では以下の三つの研究課題を設定している。(1)講義録の編集、(2)講義録の思想的分析、(3)清沢における西洋哲学受容の思想的分析。2014年度は、研究課題(1)から(3)すべてを重点課題とした。

より詳細には、2013年度に続いて2014年度は以下の作業を行った。研究課題(1)に関しては、講義時期と講義科目を再確認したうえでの講義録の翻刻・翻訳作業(デジタル画像化された資料と原資料との照合作業を含む)を行った。この作業については、「清沢満之フェノロサ講義ノート」を集中的に翻刻・翻訳する班(2名。2名以外は翻刻・翻訳業務補佐を担当)と「高嶺三吉フェノロサ講義ノート」を集中的に翻刻・翻訳する班(2名。2名以外は翻刻・翻訳業務補佐を担当)を選出し、2010年～2012年度の科学研究費研究において訳出した箇所(『フェノロサ「哲学史」講義』に所収)に続く近代哲学史講義録の箇所を整理・翻刻し、翻訳・校閲を行った(前者ノートの作業は【F063-06】～【F063-37】・【F064-02】～【F064-37】・【F065-02】～【F065-06】を対象として、後者ノートの作業は写真番号064～080・104～197を対象として行った)。

研究課題(2)と(3)に関しては、学術論文や口頭発表等のかたちで公表した研究成果は以下のものである。①村山保史“Genderimplikationen in Symbolen des Göttlichen in buddhistischen Traditionen Ostasiens” in, *Geschlechtergerechtigkeit: Herausforderung der Religionen*, Eb-Verlag, Berlin, 2014, S.307-319(論文)、②竹花洋佑「象徴と無一田辺哲学における象徴概念の由来と意味(招待講演)、第2回田辺哲学シンポジウム、北海道大学、2014年8月27日、③マイケル・コンウェイ“Shifting the Image of the Founder in the Ōtani-ha’s Doctrinal Studies: From the Shinran of the *Tannishō* to the Shinran of the *Kyōgyōshinshō*”(口頭発表)、14th International Conference of the European Association for Japanese Studies, University of Ljubljana、2014年8月29日、④マイケル・コンウェイ「阿修羅の琴と大行一親鸞と大拙の理解をめぐって」(招待講演)、親鸞仏教センター英訳『教行信証』研究会、東京国際フォーラム、2015年3月6日。

## 共同研究

# 日本における西洋哲学の初期受容 —フェノロサの東大時代 未公開講義録の翻刻・翻訳—

研究代表者・教授 村山 保史  
(西洋哲学・日本哲学)

本研究の目的は、清沢満之(1863-1903)と高嶺三吉(1861?-1887)の遺稿中に発見された東京大学在学時の哲学関係講義録(ノート)を翻刻・翻訳してE. F.

## 共同研究

# ポタラ宮所蔵ステイラマティ の俱舎論注釈書『真実義』 梵本写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授 小谷 信千代  
(仏教学)

本研究は、ヴァスバンドゥの『俱舎論』に対するインド撰述注釈文献のうち、最も大部にして最も詳細な注釈である、ステイラマティ（安慧）の『真実義』サンスクリット写本の解説を目的とする。研究の手順として、研究代表者である小谷がサンスクリットテキストとその試訳を準備したうえで、大谷大学にて定期的に研究会を開催し、研究協力者と共同で検討することを繰り返すというかたちで、研究を遂行した。さらに本研究は各年度に6葉づつの解説を目指す研究計画に基づいて遂行されており、本年度は昨年度に引き続き、第一章「界品」のうち、「十八界」の分類的考察箇所の解説を試み、サンスクリットテキストを確定した上で、試訳を完成させた。

またそれらの作業と並行して、ステイラマティの『五蘊論釈』『中辺分別論釈疏』やヤショーミトラの『俱舎論釈』との平行句を同定した。そして何より、漢語でしか現存しないとされてきたサンガバドラの『順正理論』のサンスクリット文、並びにこれまでいかなる資料からも回収しえなかった有部阿含のサンスクリット文を多く回収することができた。

従来の研究においてステイラマティという人物は、ヴァスバンドゥの著作群に対する一注釈家としてのみ捉えられてきた。しかし本研究により、ステイラマティ自身の背景、歴史的な文脈の一端が少しずつ明らかになりつつある。特に、(1)『順正理論』の文脈を精密に捉えながら、ステイラマティが『俱舎論』の注釈書を著した事実を窺い知ることが可能である。(2) またアビダルマ教義学に着目すれば、チベット文のみでは確定困難であった議論の脈絡を丹念に辿り、いくつかの点において議論の展開を明確にすることが可能である。というのもステイラマティによる注釈内容は、インド撰述のいかなる『俱舎論』注釈書より詳しく、より大

部だからである。この点はステイラマティの力量を伺い知るに充分であり、『真実義』が最重要の注釈書と目される由縁である。

## 共同研究

# 紋章との比較による系譜 の図像化規則とその構造 分析

研究代表者・教授 柴田 みゆき  
(情報処理学)

2014年度は、以下の2点を主軸とした研究活動を行い、情報処理学会第77回全国大会での発表を通じて公開した。

(A)イギリスにおける紋章情報のデータ構造化のための基礎調査。

(B)我々が考案したデータ管理手法に基づく系図表示のプロトタイプソフトウェア改良のための考察。

(A)については、系図表示ソフトウェアに反映させることを想定した紋章構造の調査を行った。紋章情報から系図を作成する際、時代とともにダイナミックに変化する図像化規則が問題となる。このため、一律な表示アルゴリズムの決定が困難である。そこでまず、紋章の図像化規則の変化の過程を考察した。その上で、紋章の持つ諸情報を保存し、系図表示ソフトウェアでも表示させるための適切なデータフォーマットを考察した。また、シェイクスピア劇作品の紋章制度に関する用語をテキスト解析し、複数の作品間で比較対照した。この結果、シェイクスピア家の紋章認証問題の推移と彼の作品内での紋章に関わる表現の変化との間に相関性があり、紋章構造の理解を解明するために彼の作品の検討が有効と確認できた。

(B)については、各個性の関係が容易に扱え、婚姻関係と子の発生を1つのイベントとして統合管理できるデータ管理手法Widespread Hands to InTErconnect BASic Elements (略称:WHItEBasE)、およびユーザの指定した矩形領域内の個性とWHItEBasEの結合関係を保持したまま縮退表示が可能なJoint ABBReviation for Organizing WHItEBasE(略称:JaBBRoW)をさらに拡充するため、以下の3点を考察した。

- (1) 神話で「モノザネ」による下位世代の発生に関する叙述の表示。
- (2) 生殖補助医療に基づく子の発生の表示。
- (3) JaBBRoW同士の重複を許す拡張を行った場合の縮退の方法、およびJaBBRoWを入れ子構造として取り扱う際に顕著な障害をもたらす丸め誤差問題の解決方法の検討。

## 個人研究

# 日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』『津島貝葉』の校訂テキスト作成

研究代表者・准教授 DASH Shobha Rani  
(インド学・仏教学)

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金〈基盤研究（C）〉2011年度～2014年度）の研究助成によって行なった。その内容は、愛媛県宇和島市津島町に残るオリヤー（オディアー）語版『マハーバーラタ』の貝葉写本「津島貝葉」（以下TB）に関するものである。

当貝葉写本は17世紀の初頭頃に書写され、江戸時代中期頃に日本に伝来したと考えられている。コロニー（Karaṇī）書体を使用し、中世オディアー語で書かれた221葉（両面記載）からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オディシャー州（旧名オリッサ州）の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ（Sāraḷādāsa）によってオディアー語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サララー・マハーバーラタ』（Sāraḷā Mahābhārata）（以下SM）の「森林章」の第一部に相当するものである。『マハーバーラタ』研究、とりわけその受容史の解明に有益である当該写本の校訂テキストの作成を中心とし、TBの異本の入手およびTBを底本としたSM「森林章」第一部の校訂テキストの作成を目的としている。これらの目的を達成するために研究を進め、2014年度は、以下の主な二つの成果を得た。

(1)TBの校訂テキストを作成するために、TBの校訂ノート付きのローマ字転写テキストに加え、入手した異本の該当箇所をローマ字入力し、偈ごとに平行に並

べ、その相違箇所のリストを作成した。その際に大きな困難と遭遇した。異本はそれぞれその内容や韻律が同じであっても、その述べ方が異なっていた。単なるバリエーションではなく、表現方法や使用単語までも異なっていたことが発見された。まるで、同じテーマの内容を複数の人が語っているかようになっていた。説話文学の性格や受容性にこれは大きな手掛かりになるに違いない。

(2)TBの冒頭部にある300余りの偈はオディシャー州文化庁出版のSMの「森林章」や入手した9本の異本に含まれていないため、それは後に挿入された部分ではないかとずっと思われていたが、それは、「森林章」の前にある「Sabhāparba」（集會章）に含まれていたことが判明した。このようにして、これらの300余りの偈は「集會章」の最後、あるいは「森林章」の冒頭部に入れることによってSMは二つの系統を持ち伝承されて来たことが明白になったことが、大きな研究成果となる。

## 個人研究

# 清代生態環境档案を用いた 西北開発における環境認識と 技術的対応に関する研究

研究代表者・講師 井黒 忍  
(歴史学・東洋史学)

本研究の目的は、18-19世紀における西北開発政策の分析を通して、当時の沙漠化に関する認識を読み解き、その技術的対応を明らかにすることにある。対象を中国甘肅省・陝西省を中心とした西北地域、中心となる資料を「清代甘肅地区生態環境档案」・「清代陝西地区生態環境档案」とする。認識と技術という内・外面双方からのアプローチに加えて、開発政策の立案・実施から結果に至るまでを総合的に考察することで、人間の認識力・発想力が持つ問題点および人間活動と自然環境との相互関係を明らかにし、歴史研究・環境研究に新たな視座を提示する。

以下、4点に分けて研究成果をまとめる。まず1点目は、沙漠化と塩類集積に関して。沙漠化と塩類集積に対して水路開削と施肥管理によって解決を図ったが、排水に対する認識不足と行政区画の変更に伴って

生じた水路の分割管理によって再生アルカリ化が進行したことを明らかにした。2点目は、境界線と資源利用に関して。政治的に設定された境界線が流域を分断し、既存の信仰形態や資源分配方式を変更させ、下流への水供給量の減少を引き起こす原因となったことを明らかにした。3点目は、地下水利用と井戸灌漑に関して。清代中期の陝西では新たな水源として地下水の利用が推進され、井戸灌漑の技術論が形成されたが、同時に地下水を無尽蔵の資源とみなす認識を生み出し、人為による自然環境の克服を代表する行為と位置づけられたことを明らかにした。最後に4点目として、水利権売買と水利組織に関して。資源分配に関連する灌漑用水の分配にかかわる技術とその背景に存在する水利秩序、水利利用に関する地域社会の観念を読み解くとともに、水分配の制度に柔軟性を賦与するものとして水利権売買の事例を考察した。前近代中国における水資源分配の方法が平等性を追求するのではなく、あらかじめ設定された傾斜配分の割合をいかに遵守するかという点に重きを置くものであったことを明らかにした。

## 個人研究

### 触法知的障害者の更生と地域生活 定着を促進するピアサポート プログラムの開発と評価

研究代表者・教授 脇中 洋  
(発達心理学・法心理学)

本研究(科研費基盤研究(C)2012年度～14年度)の最終年度にあたる2014年度は、ピアサポート的な支援へとつながる更生プログラム(クラウンング講座)の効果検証を進める予定だったものの、クラウンング講座の開講が年度末の2015年2月となって年度をまたいだ2015年6月まで開かれることになった。

そこで2014年度前半は、これまで調査してきたカナダ・ヴィクトリアのハーフウェイ・ハウス(Bill Mudge House他)や国内の更生保護施設を引き続き訪れて、仮出所者や施設職員への聞き取り調査を行った。

年度末に開始されたクラウンング講座では、SSTやCBT等の効果が見えやすいスキルや療法ではなく、

ショーとしてのクラウンングを敢えて行っている。こうした試みが受刑者にどのような変化をもたらしているのかを調べることによって、その意義や課題を探ることとした。

受講者は特化ユニット受刑者の約10名。講師はプロのクラウンである白井博之氏(G・E・JAPAN)が務め、社会福祉施設かがやき神戸のスタッフ2～3名が補助に入る。講座は週1回90分間の全16回であった。

調査方法としては、ほぼ3回ごとに行われる振り返りの回の前後に受講生および特化ユニットを担当する刑務官に対する質問紙調査を行った。受講生に対する質問項目は、体調や抑うつ、精神的安定や自己開示、他者への信頼を反映する26項目。刑務官への質問項目は、入所時からの受刑態度の変化に関する10項目と受刑者の長所や強みに関する9項目。さらに振り返り時の会話をICレコーダに録音して書き起こし作業を行った。これら振り返りの発話記録に見る障害受刑者の変化を縦断的に調査して、担当刑務官と連携しながら生活面における講座の効果検証に取り組んだ。

この他年度末には、海外の受刑者/出所者に対するピアサポート的な更生支援活動がないかを探して、短期間だがフィンランド・ヘルシンキとノルウェー・オスロの矯正施設や更生保護施設を訪問した。

## 個人研究

### バガヴァティー・アーラーダ ナーの新校訂本作成と全訳に よるジャイナ教の断食死研究

研究代表者・本学非常勤講師 河崎 豊  
(インド学・仏教学)

ジャイナ教において最古かつ最大分量を誇る断食死文献『バガヴァティー・アーラーダナー』(以下BhA)の批判的校訂本の作成と全訳とを目指す本研究の大枠は、①個別内容の検討②写本状況の調査の二点で構成される。本年度の研究概要は以下の通りである。①BhAにおける不倫盗の概念を検討する補遺作業として8世紀のジャイナ教教理文献における倫盗を正当化する議論とジャイナ教側からの批判とを検討し、2014年8月30日(土)に武蔵野大学で開催された日本印度学仏教学会で発表した。またインド共和国カルナータカ

州シュラヴァナベールゴラで開催された国際学会 Seminar on Chandragiri Inscriptions and Tradition of Prakrit Literature (2014年12月25日)ではジャイナ教における偷盗概念の諸解釈について講演を行なった(英語)。また2014年10月25日(土)に本学で開催されたジャイナ教研究会では、3年間の研究の総括を発表し、他のジャイナ教文献に見られるBhAの類似表現の具体例を提示しつつ、類似評点の網羅の一覧の作成が必要である点を議論した。以上の発表内容は全て原稿化し、2015年度迄にしかるべき学術誌に公表される(『佛教学セミナー』99号、『待兼山論叢哲学篇』48巻、『印度学仏教学研究』63巻、『ジャイナ教研究』21号、『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』26号)。② 2014年12月24日から30日にかけてインド共和国カルナータカ州を訪問し、空衣派ジャイナ教研究の権威でありHampa Nagarajiah 博士とBhA写本についての討議を行ない、またシュラヴァナベールゴラにある研究所でも専門家と討議を行なったが、充実したジャイナ教写本カタログの存在そのものについて情報を得ることができなかった。博士によると空衣派ジャイナ教徒が写本カタログの作成に今のところ積極的ではないとの由で、BhA写本の所在を確認し入手するにはより長期的な計画に基づく大規模な調査を企画する必要があることが判明した。

を行うという2つのアプローチを取る。本年度は、次の作業を実施した。

1. 前年度までに整理された所在目録(個々の文献の写本資料としての資質(例:同一タイトルの文献であってもその内容分量に異なりがあり、同一文献に複数のヴァージョンが存在する可能性)が整理され、文献ごとに様々な既出の所在目録との横断的な整理がなされたもの)をベースにして、「アーニサンサ(功德果)」と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の研究に着手した。関連資料の所在・残存状況、手持ち資料等を考慮した上で、「ānisamsa」という名称が題名に付される典型としての写本文献を選択し、それら典型として取り上げた文献について、対校可能な収集済み画像資料を基にクメール文字からローマ字に転写する作業を行う。そして2つ以上の写本からなる校合テキストを作成する。その後、作成した校合テキストを基に、校訂テキストの作成並びに読解研究を行い、タイ仏教の積徳行に関わる釈義文献の文献学的研究をスタートさせた。
2. これらの作業・研究に伴い、本年度は、「アーニサンサ」文献の基礎的研究に取り掛かれたことから、その成果を研究協力者である舟橋智哉氏と共同で8月に開催された日本印度学仏教学会第65回学術大会で報告した。報告内容を『印度学仏教学研究』第63巻第1号に「タイにおける積徳行とパリ經典の關係―貝葉写本Sabbadāna-ānisamsa―」と題する論文として発表した。また、新たに構築した所在目録・データベースについての研究成果を、11月に開催された佛教史学会第65回学術大会において報告した。

## 個人研究

### タイ国を中心とする 東南アジア撰述仏教説話 写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師 清水 洋平  
(仏教学・南伝仏教)

本研究は、従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」を受け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を行う。次に、仏教説話文献をより深く探究する手段として、その鍵となる「アーニサンサ」と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の基礎的な文献研究

## 個人研究

### 後期田辺哲学における 象徴概念の研究

研究代表者・本学非常勤講師 竹花 洋佑  
(哲学・日本哲学)

田辺哲学の基本的立場である「絶対媒介の論理」において決定的な役割を果たしているのは否定的媒介性という概念である。戦前の思想においては「種の論理」の種という概念がこれに相当するものと考えられており、『懺悔道としての哲学』以降の戦後の思想におい



てそれに当たるものと見なされているのが象徴である。田辺はこの象徴を常に表現という概念との対比で用いている。例えば、最晩年のハイデガーとの対決においては、ハイデガーの「生の存在学」に「死の弁証法」が対置されるが、これは同時に表現と象徴という実在概念の相違でもあり、前者の立場を超えるものとして後者の意義が語られている。この場合注意されなければならないのは、後期において強調される表現＝生の立場の乗り越えとしての象徴という視点は後期になって突如として、あるいは『懺悔道』における「種の論理」においてすでに現れているということである。この点を明らかにしたのが2014年度の研究である。

前年度および前々年度の研究において、西田と田辺両者における「論理的なもの」の地盤が生にあることを示し、西田の“生の論理”が生命の表現としての論理であるのに対し、田辺の“生の論理”すなわち「種の論理」が生を否定的媒介性と捉える論理であることを明らかにした。田辺において象徴という概念が浮かび上がった背景には、表現の論理ではない仕方での論理を追求するという考えがある。このことをふまえて、「象徴と無—田辺哲学における象徴概念の由来と意味—」（第2回田辺哲学シンポジウム、2014年8月27日(水)、北海道大学）において、表現概念への批判がなぜ象徴というかたちで考えられたのかという問題を明らかにした。表現概念を用いながら「種の論理」の論理偏重を批判した務台理作への反批判の内容を具体的に検討し、同時に当時の日本の哲学における象徴論（波多野精一および高山岩男）との関係を念頭におきながら、象徴概念の生成の仕方を解明し、その上で後期における象徴概念の本質が「<無いもの／こと>の現われ」として理解できることを明確にした。

## 個人研究

# 「宗教間体験の現象学」 構築のための基礎的研究

研究代表者・元任期制助教 古荘 匡義  
(宗教哲学)

本研究は宗教との対話を、宗教の理論的な「理解」としてではなく、「宗教間体験」として、すなわち宗教と関わる各個人の実践のなかで自らの宗教的なアイデンティティが保持されつつも変容していく体験として捉えた。その上で、この体験を現象学的に記述するための「宗教間体験の現象学」をミシェル・アンリの現象学を用いて構築した。さらに、この現象学的な理論に基づいて、網島梁川の宗教実践やグライ・ラマ14世の宗教間対話などの具体的な事例を分析した。その結果、この理論の有効性を示すとともに、宗教との対話における体験や帰属の重要性を明らかにした。

2014年度の研究成果は、以下の2点にまとめられる。

①本研究では、ミシェル・アンリの思想を活用して、「宗教間体験の現象学」の理論を構築する研究を2013年度より継続的に行ってきたが、その成果を課程博士論文「ミシェル・アンリの『実践＝哲学』」の一部としてまとめた。また、この理論の核心部分を*Revue internationale Michel Henry*誌にて公表した。

②具体的な事例を①の理論によって分析し、この理論の有効性を検証した。まず、①の理論によって、網島梁川による自身の神秘体験の言説化を、安心立命の獲得のための実践として解明できることを示した。また、この理論に基づいてグライ・ラマ14世の対話実践やカトリヌ・コルニールの「複合宗教帰属」の概念を分析することによって、宗教との対話における体験と帰属の重要性を明らかにし、さらに、宗教者にとっただけでなく、無宗教を自認する者にとっても諸宗教と対話することが可能かつ必要不可欠であることを示した。これらの分析から、①の理論が諸宗教とのさまざまな対話実践の分析に有用であると結論づけた。

なお、これらの成果は、日本宗教学会の学術大会における個人研究発表、あるいは、中村博武・古荘匡義・岡崎秀磨・本多真著『宗教を開く—宗教多元主義を越えて—』（聖公会出版、2015年）の第1章（「無宗教者による宗教との対話—宗教の体験と複合宗教帰属

の視点から一」)において公表した。

## 個人研究

### ディケンズと絵画

研究代表者・元任期制助教 木島 菜菜子  
(イギリス文学)

本研究はディケンズの作品が絵画から受けた影響や絵画に及ぼした影響を分析し、その結果をふまえて作品を読み直すことで、ディケンズ文学の重要な特徴の一つである視覚的な事物の描写に新しいアプローチを提示しようと試みるものである。今年度は昨年度の研究成果を踏まえ、ディケンズの見た絵画が彼の創作に及ぼした影響及びディケンズが同時代の画家に与えた影響についてより多面的に考察した。主な成果は以下の3点である。

(1)本研究成果をこれまでの研究成果に加えて博士論文Dickens and the Visual Arts: Literary Imagination and Painted Imageにまとめ、その要旨を京都大学学術情報リポジトリにて公開した。

(2)『デイヴィッド・コパフィールド』における海の場面の描写について、ターナーの風景画との関連を論じ、第86回日本英文学会において口頭発表を行った。

(3)ヴィクトリア朝を代表する画家W. P. フリスにディケンズが及ぼした影響について、またヴィクトリア朝後期にイギリス国内で発展を遂げる社会派リアリズム絵画とディケンズの関係について論じ、大谷大学西洋文学研究会で口頭発表を行い、同研究会発行の『西洋文学研究』第34号に論文を掲載した。

(4)これまでの研究成果を社会に発信する方法の一端として、若手研究者による公開講座、第16回エコール・ド・東山において「イギリス文学とオランダ絵画-19世紀イギリスにおけるリアリズム文学とジャンル画の関係について-」と題した口頭発表を行った。

これまで多くの批評家によってディケンズは絵画を理解せず、彼の創作と絵画との関係は論じるに値しないと考えられてきた。しかしディケンズの視覚的な想像力と小説の中の場面構成に、現実には彼が目にした絵画がインスピレーションを与えていたことは確かなことであり、本研究はその一端を明らかにしたと言える。

今後は特に(2)の成果について海外の雑誌で論文発表を行うとともに、ディケンズと風景画との関係の考察へと発展させて研究を進めていく予定である。

## 個人研究

### グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂

研究代表者・元任期制講師 赤枝 香奈子  
(社会学)

2014年度は、日本の女性同性愛に対するホモフォビアの形成過程を明らかにするため、主に1970年代以降の雑誌記事の収集、分析を行った。また、セクシュアル・マイノリティにとって、より望ましい社会的包摂のあり方を検討するため、同性婚をテーマとするシンポジウムや「セクシュアル・マイノリティの医療・福祉・教育を考える全国大会」等に参加し、日本のセクシュアル・マイノリティをめぐる現状や包摂のあり方について調査した。

フィンランドで夏に行った現地調査では、2013年度に引き続き、マイノリティの文化的包摂にかんする提案および実践にかかわる活動団体Culture for Allでインタビューを行ったほか、セクシュアル・マイノリティの支援を行っている全国組織SETAのヘルシンキ支部や、中高年のレズビアン/バイセクシュアル女性を中心とする活動団体でインタビューを行った。この調査では、活動団体の20年間の歴史—結成された経緯やその後の活動、メンバーの変化など—について話を聞くことができた。複数の活動団体で高齢化がテーマとなりつつある状況について情報を得たことで、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂にかんする活動やアプローチの多様性や必要性について、より広い知見を得ることができた。日本との社会保障や結婚観の違いから、活動団体に求められることに大きな差異があることも明らかになった。そのほか、ヘルシンキ大学図書館等でセクシュアル・マイノリティの社会的包摂に関係する文献資料、特にマイノリティの人権にかんする法整備に関係する資料調査および収集を行った。日本と異なり、同性同士のパートナーシップ登録制度を導入しているフィンランドで(2014年には同性婚も認

められた)、制度の導入後もどのような問題や課題が見られるのか、またそれらに対していかなる解決方法が提案、実践されているのかを知ることができたことで、今後、日本で起こりうる問題や課題を予測する手掛かりを得ることができた。

1月には北海道大学で開催された「結婚」をテーマとするシンポジウムで、これまでの研究成果をもとにレズビアン結婚をテーマとした研究発表を行った。

## 個人研究

# 共感覚の進化的起源を探る

研究代表者・講師 高橋 真  
(比較認知科学)

共感覚とは、ある刺激に対して通常感覚(e.g.視覚)だけでなく、別の感覚(e.g.聴覚)が生じる知覚現象である。「音を味わう」や「数字に色がついて見える」などの特殊な知覚経験が共感覚症として知られているが、「黄色い声」や「高音・低音」、「明るい声・暗い声」といった比喩表現とも関連していると言えよう。共感覚が生じた理由(選択圧)を知るためには、ヒト以外の動物との比較研究が重要となる。そこで、本研究はラット・ハムスターなどのネズミ目の種、および、魚類のキンギョが共感覚的な知覚を示すかどうかを検討した。

高橋らは、光の明暗と音の明暗の間の共通性をラットが知覚しているかどうかを検証するため、明暗弁別課題の遂行中に、5,000Hzの純音(明るい音)と1,000Hzの純音(暗い音)を提示した時のラットの行動を分析した。その結果、課題の成績に違いが出ることから、ヒト言語を獲得していない種の段階で音と光の共通性を知覚している可能性が示された(高橋・谷内, 2013)。また、高橋らは、テレビの砂嵐のような視覚的ノイズの共通性を動物がヒトと同様に知覚しているかを検討するため、聴覚的ノイズと一致する視覚刺激(視覚的ノイズ)と一致しない視覚刺激(直線運動)に対する動物の選好(好み)を調べた。その結果、ネズミ目のラットやハムスター(高橋・谷内・別役・藤田, 2013)も同様の知覚を生じることが示された。

本研究は哺乳類に加え、ヒトから遠く離れた種であ

る魚類にも同様の知覚が生じるかどうかを検証した。同じ手法を用いてキンギョで予備実験を行った。その結果、統計的に有意ではないが、キンギョにおいても同様の行動が生じる可能性が観察された。今後、キンギョの個体数を増やして再実験することで、キンギョにも共感覚的な知覚があるかどうかが明らかになるであろう。

## 引用文献

- 高橋真・谷内通・別役透・藤田和生 2013 ラット・ハムスター・ヒトの共感覚 『日本心理学会第77回大会発表論文集』, p571. 2013年9月19日 札幌コンベンションセンター。
- 高橋真・谷内通 2013 ラットは音と光の明るさの共感覚を示すか? 『動物心理学研究』, 63巻, p165.

## 個人研究

# インド・チベットにおける般若学の研究

研究代表者・名誉教授 白館 戒雲  
(仏教学)

本研究では、『般若波羅蜜経』の綱要書マイトレーヤ著『現観莊嚴論』、ハリバドラ著『註釈・明義』(いわゆる『小註』)、それに対するタルマ・リンチェン(Dar ma rin chen.1364-1432)著『釈論・心髓莊嚴』を和訳研究している。本研究者は1950-60年代に伝統的方法により『釈論・心髓莊嚴』、セラ・ジェツンパの註釈を学んだ。『釈論・心髓莊嚴』は註釈書、綱要書も著されており、「般若学」で最重要の教科書であるが、学僧たちに周知の事柄は簡略に記されているので、ツォンカパ著『善釈・金鬘』、セラ・ジェツンパの『註釈・遊戯海』を参照し、その文脈を解明しようと努めている。

その第1章は第17偈までの概論部分に続いて最後の第73偈まで、発心、教誡から出離行までの十項目により大乘の仏道が概説されている。当年度には、第1章第25-26偈の部分と和訳研究した。この部分は、洞察へ導く段階である順決択分を論ずるうち、前半の概説部分であり、菩薩の加行道が所縁と形相と因と摂受との四点、そして四の分別を具えていることと

小・中・大により、声聞・独覚のそれよりも勝れていることを、説いている。成果は、ツルティム・ケサン、藤仲孝司『『現観莊嚴論の釈・心髓莊嚴』第1章より「順決択分」の和訳研究』（『成田山仏教研究所紀要』38,2015）として発表した。下訳は第6章までできており、読み合わせと経論の典拠の調査も第4章まで終了した。2018年度に全体の和訳研究を公刊することを目指している。

副次的研究としては、ツォンカパの顕教での主著『菩提道次第大論』（『現観莊嚴論』の教誡とも言われる）の大乗の道次第の部分の前半を詳しく研究し、『ツォンカパ 菩提道次第大論の研究Ⅱ』（Unio Corporation）として公刊した。

## 個人研究

### 『中辺分別論』の未解説チベット語註釈写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師 松下 俊英  
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献に収められている、『中辺分別論』のチベット人（作者不明）による註釈写本を研究対象とし、当該写本の読解を目的とする。

世親が註釈をなした『中辺分別論』は、安慧のサンスクリット復註が現存し、それにもとづき世親釈を読解することが今日の唯識思想研究の主たる方法である。しかし安慧釈の写本は右側3分の1が欠損している上、『中辺分別論』に対するインド撰述の註釈書は安慧釈以外現存しないことから、『中辺分別論』の正確な読解にはチベット撰述の註釈が重要な役割を持つ。よって本研究は、『中辺分別論』の内容理解の一助となる当該写本の読解を目的とする。

本研究対象写本の体裁は、『中辺分別論』の偈をウチェン書体の朱字で書き、世親による註釈をウチェン書体の黒字で書き記している。さらに『中辺分別論』が記されている行間に、ウメー書体で細かな註釈がほどこされている。

ウメー書体で記されたチベット語註釈は、複数の行をもち、コラムのような形式で、ウチェン書体で書写された『中辺分別論』の行間に点在している。コラム

とコラムの間が不明瞭な場合があり、またそれぞれのコラムが『中辺分別論』のどの部分に対する註釈かが明確でないため、まずは細心の注意を払い、各コラムを区分し、そのコラムごとに翻字作業を実施した。

また、本研究と関連する写本が、ナーランダー大学・博物館、ジャワスワル研究所、ラクナウ博物館等に所蔵されているため、平成27年3月3日より同年3月12日の間、上記の博物館等の写本調査を行った。その際、本研究対象写本と特に関連する資料のリスト作成を行った。また、ナーランダー大学ではBuddhadev Bhattacharya准教授及びLalan Kumar Jha教授との情報交換を行い、現在のインドにおける文献研究状況、専門的知識の提供を受けた。

これらを受けて、平成27年度は、昨年度に引き続き、当該写本文献の精密な読解による翻訳作業とテキスト作成を行う予定である。また、ウメー書体は専門的知識が必要なため、先行研究者との意見交換を行い、さらに翻字・翻訳の正確性の向上を取り計らう予定である。

## 個人研究

### 初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究

研究代表者・教授 福田 洋一  
(仏教学)

本研究課題は、チベット論理学がどのような過程で形成されていったかを解明するための基礎研究を提供することを目標としている。

初期のチベット論理学の文献は失われたと考えていたが、2002年にラサで大量に発見され、2008年以降、順次刊行されつつある。これらの文献は草書体で書かれた写本であり、略字や誤記が多数含まれ、印刷も不鮮明な箇所があり、読みづらい。また議論内容が、われわれに身近な後代のチベット論理学と大きく異なっているため、文脈を把握することも困難である。これらを情報処理の手法を用いながら分析し、難解な初期チベット論理学文献の読解に資する基礎資料を作成することが本研究課題の当面の目標である。

本研究課題の初年度である2014年度は、まず出発点となるべきテキストの入力を進め、それらに基づいて

KWIC検索ができるプログラムを作成した。2014年度に入力したテキストは、

- (1) チュミクパ・センゲペルの『量七部論の意味を一箇所に集約したもの』
- (2) チョンデン・リクペーレルディ『量決択を荘厳する華』
- (3) チャバ・チューキセンゲ『量・心の闇の除去』の第四章まで

である。これに既存の入力データとしてゴク・ロデンシェーラップの『量決択難語釈』、チャバの『量決択註般若の光明』、サキヤ・パンディタ『量・正理の蔵』、チョンデン・リクペーレルディの『量七部論を荘厳する華』および比較対象するものとしてゲルク派のタルマリンチェンの『量評釈註・解脱道解明』のオンラインKWIC検索サイトを公開した (<http://tibetan-studies.net/tiblogsearch/>)。本研究課題の成果についてもWebサイト (<http://tibetan-studies.net/tiblogic/>) を開設し、随時情報をアップしている。

個別的な研究として、研究代表者福田は上記検索サイトについてハイデルベルグでの国際ダルマキールティ学会および苫小牧駒澤大学における日本チベット学会チベット情報交換会において報告し、研究分担者石田はチベット語訳にしかないダルモッタラのアポーハ論について、研究協力者の崔はゴク、チャバラ初期カダム派の註釈書における刹那滅論証についての研究成果を発表した。

## 個人研究

### 移行期正義の社会的影響に関する比較社会学的研究

研究代表者・准教授 阿部 利洋  
(社会学)

本研究の目的は、冷戦終了後に増加している移行期正義(TJ)政策の課題と効果を、社会学的な枠組みから理解することである。体制移行のタイプや地域を問わず採用される一方で、活動の評価に関しては否定的な論考の多いTJではあるが、その政策が遂行される社会状況を考えれば、むしろさまざまな批判が継続的に提出される状況自体が、移行期の社会的特徴を表しているのではないか、という観点から研究をスター

トした。

まずは理論的な参照点を社会運動論の知見に求めた。これは、TJ組織(もしくはTJを設置するローカル政府)が、社会構成員の承認を無条件に得られているわけではなく、とりわけ広報と動員を通じて自らの正当性をアピールし、その理念と方向性に賛同する人々を増やしていくことで、活動の実効性を高めるねらいを持つ点から引き出される視点である。こうした視点に基づき、カンボジアでの現地調査およびギリスでの資料収集を行った。

その結果、TJ組織側の活動に焦点を当てた分析には社会運動論の観点が有効である一方で、そのプロセスに参加あるいは不参加を表明するローカル当事者について考察を深めるには、また別の枠組みを導入する必要性が認識された。たとえばTJプログラムに参加しつつ公式のものとは異なる意味世界を享受したり、そもそもそうした公式の意味づけに挑戦するためにTJの場に登場したりする人々の能動性は、社会学的にはドラマトゥルギー論によってより明確に把握することができる。

次年度は、このように修正された分析枠組みが、TJ実施社会のデータと整合性を持つかどうか、検討することが課題である。

2014年度の成果は以下の通り。

[論文]

1. Toshihiro Abe, 2014, 'Standing by/for Their Own Feet: African Soccer Players in Cambodia' in Mine Y. and S. Cornelissen eds., *Africa and Asia: Entanglements in Past and Present* (GRM Program, Doshisha University), pp.201-214
2. Toshihiro Abe, 2014, 'Transitional Justice Destined to be Criticised as Failure: Understanding its Uniqueness from African Cases', Ohta, I. et al. eds. *Conflict Resolution and Coexistence: Realizing African Potentials*, African Study Monographs Supplementary Issue 50, pp. 3-23.
3. 阿部利洋、2014、「紛争処理」、『アフリカ社会を学ぶ人のために』(松田素二編、世界思想社)、266-277頁
4. 阿部利洋、2014、「マンデラの笑顔は問いかける—和解政策というアート」『現代思想』第42巻第3号、152-161頁

## 個人研究

### 古代中国文献に関する 表現形式に基づく評価基準の構築

研究代表者・元本学非常勤講師 鈴木 達明  
(中国文学)

本研究は、先秦から前漢にかけての文献資料を対象として、それらに出現する表現形式に着目し、歴史言語学に基づくテキスト分析等の方法により、その発展段階・地域性・学派性を明らかにすることで、従来の学術モデルを再検討し、テキストの成立に関する新たな評価基準を提案することを目的とする。

そのための調査としては、(1) 押韻句、(2) 会話中の反応表現、(3) 定型的言い回しの三種の表現形式を軸とする。本年度は、関連する原典資料の読解を通して、各種の表現形式の出現状況を把握することに努めた。その上で、特に(2) 会話中の反応表現(研究の進展にともない、「対話型説話における演出的な叙述」と呼称を改める)について重点的に調査・分析を行った。その概要は以下の通りである。

諸子資料には、数多くの多彩な寓話が含まれることは周知の通りである。その中でも、対話を中心とした寓話において、地の文の中で話者や聞き手の状態を描写する表現方法に注目し、『莊子』を中心として、『晏子春秋』や『戦国策』などの対話文を多く含む歴史故事、『論語』『孟子』『荀子』『韓非子』等の先秦諸子文献、『史記』『説苑』『新序』などの漢代資料について比較調査を行った。なお出土資料についても調査したが、当該の表現形式については、出現頻度の少なさから積極的な活用は難しいことがわかった。

この調査に基づく成果を、2014年10月11日(土)に本学で開催された日本中国学会第66回大会にて発表した。そこでは、対話を含む寓話の地の文において、主に接尾辞を伴う状態形容詞を用いて登場人物の状況を生き生きと描写する表現を取り上げ、他のテキストとの比較から、『莊子』の独自性とその原因について考察した。加えて、その表現技法の差違を軸とすることにより、『莊子』内部の成立の差違について新しい判断材料を提供し、また『史記』や漢賦など、漢代文献への影響関係についても新たに指摘できるところがあった(発表に基づく論文は2015年10月発行の『日本中国学会報』

第六十七集に掲載)。

今後は計画に従い、引き続き他の表現形式についても調査・分析をすすめてゆく。

## 個人研究

### 9.11 後戦争形成過程の宗教 社会学的研究

研究代表者・特任教授 飯田 剛史  
(社会学)

研究課題について国内で文献収集のうえ、2014年11月にニューヨーク9.11 メモリアル・ミュージアムおよびワシントンD.Cの国立公文書館などでの資料調査を行った。

研究成果として、論文「9.11テロ事件からイラク戦争への米政策、マスコミ、世論の動態過程—「集合意識」による解明・試論—」を『大谷大学研究年報』(第67集、2015年3月)に発表し、報告記事「9/11メモリアル・ミュージアムと“記憶”の変容」を『書香』(大谷大学図書館・博物館報 第32号2015年3月)に寄稿した。

#### 研究内容要旨

デュルケムの宗教社会学より〈集合意識—象徴モデル〉を理論仮説として構成し、課題テーマを分析した。集合意識とは、「同じ社会の成員の平均に共通な諸信念と諸感情の総体」(デュルケム)であり、社会的に共有される価値観、倫理、愛国意識などがこれに当たる。社会の共有価値が侵害されると人々は、怒り、混乱、悲嘆などの強烈な興奮状態を共に経験する。このとき集合意識は活性化され、集合的エネルギーの急激な高まりが生じる。この集合意識の状態に政治的表現が与えられ「敵」が示されると人々は「敵」への攻撃に動員されてゆく。

2001年9月11日のニューヨーク世界貿易センタービル崩壊とペンタゴン被害に対し、ブッシュ大統領は直ちに「テロとの闘い」を宣言した。世論の大統領支持率は90%に跳ね上がった。これは集合意識の急激な盛り上がりと言える。同年10月にはテロリストの根拠地とされるアフガニスタン攻撃が行われた。米政府はイラクを次の攻撃目標とした。イラクのフセイン政権に対

してはネオコングループによって既に1998年に攻撃計画が策定されていた。9.11テロは米政府で要職を占めるネオコンにとってイラク攻撃の好機となった。戦争の大義名分として、フセイン政権とテロリスト集団との繋がりが、次に大量破壊兵器の保有が主張された。これらについて明確な根拠を示しえないまま、米政府は2003年3月イラク攻撃を開始した。世論の70%は大統領を支持した。フセイン政権は40日余りで崩壊したが、その後混乱が拡大しイラク人、米兵の死者が増大すると、米政府への批判が高まった。2005年には大統領支持率は50%を切り、2007年には30%を下まわった。国民的規模の政府支持の集合意識は解体したと言える。

イラク戦争の真原因として、ネオコン謀略説、石油利権説などがあるが、9.11テロによる集合意識の急激な高まりが戦争を発動させる不可欠の契機となったといえることができる。

## 個人研究

### 低酸素環境下登坂歩行運動における登山熟練者呼吸スキルの解明

研究代表者・准教授 井上 摩紀  
(体育学)

低酸素環境での登坂歩行中の呼吸運動と歩行リズムに着目した本研究課題について、2014年度は前年度に他大学の低酸素室を借用して登山熟練者を対象に実施した実験結果を一般人での結果と比較を行うなど実験のデータをさらに精査した。この実験は星野聡子（奈良女子大学）・小森康加（大阪国際大学）の両氏との共同研究である。

実験について検討を重ね、得られた結果は、低酸素環境で、かつ、運動強度が高くなる傾斜角度が大きい登坂時には、登山熟練者は「呼吸はしっかりと腹部を使って一気に行き、吸気は胸部を使って時間をかけ2段階で行っていた」というものと「熟練者の呼吸は歩行運動のリズムと一致した一定のパターンを持つ」というものであった。2014年度に行った検討では、このような呼吸運動および歩行リズムは、一般人には確認されず、また、熟練者にも平常酸素濃度や低い運動強

度では確認されなかった。

この結果から、この特徴的な呼吸方法が登山技術として一般化でき確立できるのか、あるいは他者に移植可能かなど、低酸素環境下での実験における新たな課題が生じた。

これらの課題をさらに検討するため、2014年度には、真宗総合研究所からの助成によって得られた新たな装置である「吸引式低酸素発生装置 (YHS-B05)」（マスク式吸入型で移動可能）を実験環境に設置した。この装置の試運転と実際に使用した予備実験を行い、これまで借用していた低酸素室での実験とほぼ同じ条件での実験が可能であることを確認した。その上で、呼吸方法と歩行リズムに関する本実験を行った。

実験課題は先の実験で明らかとなった「熟練者の呼吸スキル」を登山未経験者に伝達し、一定期間のトレーニングを行い、トレーニング前後の呼吸運動と歩行リズムを比較するというものである。この実験は現在も被験者数を増やし、教示やトレーニング方法を変えるなど実験・検証を繰り返し、2015年度も継続中である。

## 個人研究

### 生業の域内多様度とその形成過程：東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較

研究代表者・元任期制助教 中井 信介  
(文化人類学・人文地理学)

#### 1 はじめに

本研究の目的は、東南アジア大陸部における農耕民モン (Hmong) を事例に、彼らの生業の「域内多様度」とその形成過程を明らかにすることである。具体的にはタイ北部ナーン県における域内モン村落のフィールド調査資料を中心に、タイ国内の他県やラオス北部のモン村落の事例をあわせて比較検討することから課題に取り組む。

2014年度は3年間の研究期間の初年度にあたり、研究実施計画に沿って、フィールドでの現地調査を中心とした次のような活動を行った。まず、タイでの現地調査および資料収集を2014年8月に実施した。調査では比較のための新規調査地の設定に時間をとり、ベトナムのモン村落での調査を開始した。また、

帰国後は調査データの整理と結果のとりまとめを行い、2015年度の研究計画を再検討した。

## 2 現在までの達成度

2014年度は、今後の広域比較を視野にいたした新規調査地の設定に主な目的を置いて活動を行った。この目的は順調に達成され、2015年度以降もこの新規調査地での継続的な調査を行うことから、本研究の目的である生業の域内多様度についての考察が可能になると考えている。

## 3 今後の研究

2015年度もフィールド調査を中心とした研究を進める予定である。これまでも調査を行ってきたナーン県の調査地、および本年度新たに設定したベッチャブーン県の調査地において、生業変化と定住化の関係性に焦点をおいた調査を行う。

## 4 研究成果発表

- a 中井信介 2014 「モン族社会における家畜飼育の政治生態学的理解に向けて」第14回熱帯家畜利用研究会（2014年6月、国立民族学博物館）
- b 中井信介 2015 「焼畑農耕民モンの料理文化と生態資源利用」総合研究大学院大学・学融合研究プロジェクト・研究会『料理の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト（代表野林厚志）』（2015年3月、横浜）
- c 中井信介 2015 「家畜飼育の専門化に関する予備的報告 タイにおけるモン村落の事例比較」第15回熱帯家畜利用研究会（2015年3月、馬の博物館）



# 海外学会参加報告

## 国際宗教史学会第21回学術大会参加報告

国際仏教研究 研究員・教授 Robert F. Rhodes

2015年8月24日(月)から28日(金)の間、ドイツのエアフルトで開催された国際宗教史学会第21回世界学術大会(XXI World Congress of the International Association of the History of Religions、以下 IAHR と略称する)に参加し、パネル発表をする機会を得た。IAHRはヨーロッパ、アメリカやアジア諸国の宗教学会が加盟する包括的な学会で、5年おきに世界大会を行っている。今回の大会は2015年の8月23日から29日の7日間に渡って開催されたが、残念ながら我々発表者の都合で、初日(23日)の開会式と最終日(29日)の閉会式は参加できず、実際に参加できたのは24日から28日のみであった。

会場となったエアフルト大学は1379年に創立されたドイツ最古の大学であり、1509年にはマルティン・ルターがここで博士号を取得している。今回のIAHRには、世界中から1000人以上の参加者(そのうち日本からの参加者は80人)が集う大規模なものであり、毎日100近いパネルが設けられていた。パネルの内容は多岐に渡っていたが、仏教や日本の宗教に関するパネルは20ほど設けられていた。そのなかでも、近年日本の仏教者による新しい伝道の試みを紹介したジョン・ネルソン(John Nelson)の話題作である *Experimental Buddhism* (『実験的仏教』)を検証し応用した発表からなる“Experimental Buddhism: New Paradigms and Revolutionary Patterns in Japan and North America”、東日本大震災以降のスピリチュアル・ケアを取り上げた“Transcending Borders in the Wake of Catastrophe: Religion and Spiritual Care after the 11 March 2011 Earthquake in Japan”、または井筒俊彦の思想を取り上げた“Toshihiko Izutsu and Oriental Religious Thought”などは特に興味深かった。

さて、私たちが今回組織したパネルは“Attempts at Adaptation in Contemporary Japanese Buddhism: Organizational and Discursive Transformation in the Pure Land Tradition”(日本仏教における現代的適応—浄土教における組織的・思想的変化)というものであった。パネル発表の最終日に当たる28日の15:30～17:30という、あいにくの時間帯のため聴衆は少なかつ

たが、最後まで熱心に聞いてくれた人が多かったことはとてもありがたかった。以下、このパネルの発表者と発表概要を挙げておく。なお、司会はマイケル・コンウェイ(講師、真宗学)が担当し、コメンテーターはマールブルグ大学名誉教授のマイケル・バイ先生にお願いした。

### (1) ロバートF. ローズ(教授、仏教学) “Transforming and Re-transforming Japanese Pure Land Buddhism”

この発表では、真宗大谷派の同朋会運動を取り上げ、この運動が「家の宗教から個の自覚の宗教へ」というスローガンのもと、いわゆる「葬式仏教」を批判し、近代的な個の自覚に基づく信仰を確立しようとしたことを紹介した。その上で発表の後半では、同朋会運動の成果は大谷派に定着しているが、この数年のあいだ東日本大震災の影響もあって、大谷派内でも徐々に葬儀を見直そうとする機運が芽生えていることを指摘した。

### (2) 木越康(教授、真宗学) “The Struggles of Traditional Buddhist Denominations in Contemporary Japan: The Disappearing Honzon”

日本の仏教教団が最近直面している課題を紹介。少子高齢化により、日本全土に存続困難が予測される「生滅可能性都市」が増えている。多くの伝統寺院もそのような地域に存在するが、再生の取り組みと課題について、真宗大谷派の例を挙げながら報告した。無住寺院の増加に伴い仏像の盗難が増加する中、本尊を博物館に移管し、寺院に3Dプリンターでつくったコピー本尊を安置するという興味深い事例も紹介した。

### (3) 藤枝真(准教授、宗教学) “Secularized Statements by Japanese Buddhist Denominations Concerning Brain Death and Organ Transplants”

この発表のなかで、まず個人化された宗教性が人々に浸透していく中で、既存の制度宗教はその求心力の低下をみずから促進しているように見えることを指摘した。例えば脳死・臓器移植問題について、生命倫理学の世俗化された言説にあわせるような形で、仏教各教団は独自の語彙をできるだけ用いずに声明を発信する傾向にある。この傾向は、公共的議論における必要なマナーであると評価できるが、その一方で、それは

世俗化された言説への教団の「過剰適応」であり、生死の問題に関する伝統的で豊かな言説を自ら放棄する危険性も併せ持っていることを訴えた。

(4) 新田智通 (講師、仏教学) “The Incorporation of Methods of Contemporary Psychology into Shin Buddhist Ministry”

近年その機運が高まりつつある「宗教者による心の

ケア」の一形態として浄土真宗の一部において行われている「ビハーラ運動」を取り上げて、その誕生と展開の経緯や、そこに含まれている諸問題（特に伝統的な仏教や真宗の教義による運動の裏付けと、「近代仏教」に特徴的な超宗派性との緊張関係の問題）について論じた。



ロバート F. ローズ教授の発表風景



藤枝真准教授の発表風景

## 国際真宗学会第 17 回学術大会参加報告

国際仏教研究 研究代表者・准教授 井上 尚実

本年 8 月 7 日(金)から 9 日(日)の 3 日間、アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市の仏教大学院 (Institute of Buddhist Studies) で開催された国際真宗学会第 17 回学術大会 (17th Biannual Conference of the International Association for Shin Buddhist Studies) に英米班でパネルを組織して参加し、研究発表を行った。以下、その概要を報告する。

これまで国際真宗学会は 2 年に 1 回の学術大会を日本と海外 (北米・ハワイ) の交代で開催してきたが、前回 2013 年のバンクーバーに続いて今回も北米のバークレーで開催されることになった。これは様々な事情によるが、英語による学問的な真宗研究が北米で活発になってきたことを端的に示している。バンクーバー大会も今回のバークレー大会も、国際真宗学会を支えてきた従来の中心メンバーに加え、北米の大学に所属する若手の研究者が顔を揃えており、真宗研究の新世代が確かに育っているという印象を受けた。

今回の大会は Subjectivity in Pure Land Buddhism (浄土教における主体性) をテーマとしていたので、英米班では大谷派近代教学における主体性の問題を取り上げ、加来雄之教授、西本祐攝講師、マイケル・コンウェイ研究員、筆者の真宗学科教員 4 名でパネルを構成した。英語ネイティブのコンウェイ研究員がコーディネーターを務め、6 月の *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムでの発表を発展させる形で臨むことになった。パネルのテーマと論文題目 (発表順) は以下の通りである。

テーマ: The Clarification of the Issue of Religious Subjectivity in Modern Ōtani-ha Doctrinal Studies (大谷派近代教学における宗教的主体性の問題の解明)

(1) Takami Inoue, “Individual and Communal Aspects of “Self” and “Subjectivity” in the Modern Shin Buddhist Thought of Ōtani-ha.” (近代大谷派教学における「自己」および「主体性」の個人的側面

と公共的側面)

(2) Yūsetsu Nishimoto. “Companions on the Way in the Tathāgata’s Light: The Incorporation of the *Tannishō* in Kiyozawa Manshi’s Thought.” (如来光明中の同朋: 清沢満之の思想における『歎異抄』の受容)

(3) Michael Conway. “The Subject, Not Object, of Faith: Soga Ryōjin’s Reinterpretation of Dharmākara Bodhisattva’s Role in Shin Soteriology.” (信の対象ではなく主体: 曾我量深による真宗救済論における法蔵菩薩の再解釈)

(4) Takeshu Kaku, “Being within the Tathāgata: Yasuda Rijin’s Laying of a Foundation for the Religious Subject.” (如来内存在: 安田理深における宗教的主体信心の基礎づけ)

発表後には活発な質疑応答が行われ、英語圏における大谷派近代教学への関心の高さを感じた。

今回のパークレー大会は3日間に10のパネル、40あまりの論文が発表され、どのセッションも活気があり、国際的な真宗・浄土教研究の発展を実感する学術大会であった。近年、博士論文のため大谷大学で留学研究に従事したジェシカ・メイン博士(プリティッシュ・コロンビア大学)、ジェシー・スターリング博士(ルイス・アンド・クラーク大学)、ジェフ・シュローダー博士(デューク大学)が発表し、阿満道尋嘱託研究員(アラスカ州立大学)がそれに応答したパネル9は、近現代の大谷派に関する充実した内容で注目を集めていた。またヤコブ・ザモルスキー氏(台湾国立政治大学)も、近代の浄土教学と唯識学に関する発表を行なった。その他、大谷大学と縁の深いゲイレン・アムシュタッツ博士やシカゴ仏教会のパティ・ナカイ師も、それぞ

れ真宗における主体性の問題について、刺激的で印象に残る発表を行っている。8日(土)の夕方にはルイス・O・ゴメス教授による“So Distant and Yet So Close: Contemporary Reflections on the Hope of a Limitless Light”(遙か遠いが凄く近い: 無量光という希望についての同時代的考察)と題された基調講演があり、大勢の聴衆が熱心に耳を傾けた。

大会前日の8月6日(木)には、龍谷大学翻訳センターとIBSの現代真宗学プログラムの共催で“Shinran and the Sutra of Immeasurable Life: Reflections on Reading in the Buddhist Tradition”(親鸞と『無量寿経』: 仏教の伝統における「読み」の考察)と題されたシンポジウムが開催され、聴講することができた。また7日(金)夕方にはIBS President’s Award(仏教大学院学長賞)の贈呈式があり、長年カリフォルニア大学パークレー校の仏教学プログラムの中心にあったルイス・ランカスター教授に賞が贈られ、跡を継ぐ現職のマーク・ブラム教授(国際仏教研究嘱託研究員)から感動的なスピーチがあった。ブラム教授自身も『大般涅槃経』の英訳(*The Nirvana Sutra*, Vol.1, BDK English Tripiṭaka, 2013)によって2015年度のKhyentse Foundation Prize for Outstanding Translation(ケンツェ財団翻訳賞)を受賞し、その贈呈式が最終日に行われた。

学会期間中に阿満道尋嘱託研究員、ジェームズ・ドビンズ嘱託研究員(オバーリン大学教授)、そしてパークレー在住の羽田信生嘱託研究員(毎田周一センター所長)とも親しく懇談する機会があり、充実して有意義な海外学会出張であった。



大谷大学パネル(向かって左から西本、加来、コンウェイ、井上の各氏による質疑応答)



パネル9(阿満、シュローダー、スターリング、メイン、フリードリックの各氏による質疑応答)

## 海外研究調査報告

# 国際ラカン協会の夏のセミナー参加と、タデウシュ・カントルの演劇の資料館(クリコテカ)の調査とカントルの劇作品の背景としてのクラクフとアウシュヴィッツ調査

一般研究 研究代表者・教授 番場 寛

今回の調査地はパリとクラクフおよびオシフィエンチムである。それぞれ研究方法の理論的研究としてのジャック・ラカンのセミナーに関する研究会への参加と、研究対象の一つであるタデウシュ・カントルの劇の背景を探るという二つの目的のもとになされた。

### 日程

8月25日：関西国際空港出発同日パリに到着

8月26日より29日まで：「国際ラカン協会」の夏のセミナーに参加

8月31日：数件の書店にて資料収集

9月1日より3日まで：タデウシュ・カントルの資料館クリコテカと旧クリコテカと、劇作品の背景となったクラクフの調査

9月4日：カントルの劇に影響を与えているアウシュヴィッツ強制収容所跡の調査

9月5日：パリに戻り接続便を待つため一泊したのち翌6日の便に乗り、7日に帰国

### 国際ラカン協会の夏のセミナーへの参加

国際ラカン協会の例年の夏のセミナーと同様、一年以上もかけてジャック・ラカンのセミナーの第24巻の読解と、それを理論的に発展させたり、臨床に当て嵌めたりしたものを発表し、それについて討論がなされ、聴衆からも疑問や意見が述べられた。

この第24巻のセミナーの特徴は、その前の第23巻の『サントム』において全面的に展開していた「ポロメオ結び」という現実界、象徴界、想像界という3つの輪が離れがたく組み合わせられている図から、トーラスという、中が空のゴムでできたチューブのようなドーナツ形の図を新たに使用し、それまでとは異なった説明の仕方をしてしている点である。奇抜なトポロジーにも拘わらず、常に問題とされているのは、フロイトが唱えた3つの同一化の問題であり、ラカンはそれを独自の仕方でもって発展させていることが分かった。

国際ラカン協会のセミナーでは、ラカンの講義に沿った説明とそれを発展させ臨床面での説明を試みた発表、まだ言語化されない幼児の発生をオシログラフ

と映像に取り、ラカン理論でそこから読み取れるものを説明した発表、詩的言語（文学言語）についてラカンが述べていることを説明しようと試みた発表などが印象深かった。

### クラクフでの調査

ホテルに5時前に到着できたので、その日のうちに最も主要な研究テーマであるタデウシュ・カントルの使用した舞台装置や彼の作品の殆どすべての映像が流れている資料館クリコテカに行き、2時間ほど調査することができた。また帰りに資料館の本屋で、フランス語と英語で書かれている書物類とカントルの演劇作品を収めてあるDVDを購入することができた。

翌日はカントルが暮らしていた家であり、現在は旧クリコテカとなっている家を訪れた。管理人が、カントルが暮らしていた部屋を見せてくれ、さらに別室で公開されていた画家でもあったカントルのドローイング作品を見ることができた。彼の住んでいた家がクラクフの旧市街にあることを確認した。

また、映画『シンドラーのリスト』のモデルとなったシンドラーの工場跡が博物館になっているので、そこに行き、ナチス支配下における工場の歴史を説明する展示と映像を見て回った。その後すぐ隣の土地に建っている現代美術館に行った。そこで「アウシュヴィッツの記憶」というテーマの展示を見た。それはアウシュヴィッツが現代の芸術家に与えた影響を目の当たりにすることができた。

その後、クラクフのユダヤ人がかつて多く住んでおり今もその痕跡が随所に残っている旧ユダヤ人居住区とそこに残るモスクを見学した。この旧市街のこれらの地区では、カントルの作品、特に自伝的な『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』に見られるカトリックとユダヤ教の混在した雰囲気の影響を伺うことが出来た。カントルの演劇にはキリスト教だけでなく、ユダヤ教の入り交じった背景があるという鴻英良氏の説明に納得した。

翌日はもう一度、初日に見た新しいクリコテカに行

き、初日に見ることのできなかつた長いビデオを、椅子を借りてそこに座ってすべて見た。

#### アウシュヴィッツ博物館及びビルケナウ（オシフィエンチム）での調査

朝早くバスに乗り、アウシュヴィッツ博物館へ行った。そこで出発前に予約しておいたフランス語の堪能な専門ガイドのもと6時間にわたるアウシュヴィッツとビルケナウ強制収容所跡を見学した。専用のガイドということもあり、聞き取れなかったところ、理解できないところの質問にも丁寧に答えてくれ、非常に有意義な見学であった。

病死や、どのような行程を経てガス室で虐殺されたのかを、膨大な数に上るユダヤ人やロマの人たちの被害者の遺品と写真、残されているガス室とガスに使われた薬品の空き缶で知るだけでなく、ビルケナウにはほぼ当時の姿で残る収容所跡と、ナチスが撤退する時に

破壊したガス室の残骸からカントルの劇、特に『私は二度とここには戻らない』の背景を伺うことができた。



写真はクリコテカで展示されている、カントルの『死の教室』で使用された舞台装置

## 北欧の更生保護実態調査報告

一般研究 研究代表者・教授 脇中 洋

本調査は、一般研究「触法知的障害者に対するピアサポート型な更生支援活動の実践とその評価」の調査の一環として、並行して調査研究中の日本やカナダ・ヴィクトリアとの比較考察を行うために、フィンランドとノルウェーの刑務所および更生保護施設を訪れたものである。北欧は周知の通り死刑は全廃されており、刑罰に関しても応報的なものというよりも教育刑として位置づけられていて、世界全体を見渡しても犯罪者への寛容さに溢れていることで知られている。

2015年9月7日(月)関西空港からヘルシンキに入り4泊。9月7日～11日ヘルシンキ滞在中に、ヘルシンキ刑務所、スオメンリンナ島開放刑務所のほか、マッドハウス（ハーフウェイハウス）における演劇の取り組みなどを参観することができた。またヘルシンキの知的障害者の音楽グループの公演活動（ライブ）も見ることができた。

日本の矯正施設との最も大きな違いは、刑務所ごとにセキュリティレベルが多様で、ミニマム・セキュリティのスオメンリンナ刑務所は、世界文化遺産の観光客が歩く島の中にあつて、腰の高さほどの柵の扉も開いた状態である。また日本のような懲役刑はないので受刑作業を義務付けられていないし、できるだけ短い期間での出所を促して社会内処遇を図っている。社会

復帰のためには、長期間刑務所にいることは社会的不適応をもたらすと考えられているのである。そしてたとえ犯罪者であっても基本的人権は決してないがしろにはせず、受刑中も出所後も医療や住宅などの福祉的支援からこぼれ落ちないように配慮が徹底している。

その一方で出所後の就労に向けて教育や様々な作業に取り組んでいる点は、日本と同様である。ヘルシンキ刑務所内では自動車やバイクのナンバープレートを制作したり、自転車の補修を行ったりしていた。

開放刑務所では、農作業や木工作業のほか、演劇活動や遊園地の遊具の補修など、より多様な活動が見られた。日本の刑務所よりも出所者を迎える更生保護施設に近い。ただし北欧では出所後も、より直接的な就労支援を行っているように見えた。

9月11日(金)にヘルシンキからオスロに移動。9月11日～9月14日のオスロ滞在中には、ボストイ島刑務所、オスロ刑務所、サンダカール・ハーフウェイハウスを調べることができ、受刑者が出所した後の地域生活定着支援のありようの一端を知ることができた。

オスロ刑務所は北欧最大規模の刑務所で建物も相当年月が経っているが、入口周辺のアプローチの芝生は広々としていて、子どもや犬を連れた市民の憩いの場

にもなっていた。それに対してオスロ湾に浮かぶポストイ島は、オスロ近郊の港からフェリーで15分ほどと隔てられており、島内は牧場などがあってのどかな環境だが、一般市民との距離は遠い感じだった。

一方、オスロ市内にあるサンダカールにおいては、Way Back Osloという刑務所出所者同士のピアサポート活動を行っていることを今回初めて知ることができた。矯正施設退所者のピアサポートという点、一般には「悪い仲間同士」で再犯につながるリスクが高いことが懸念される。Way Back Osloではどんな犯罪類型の出所者がどのような運営方法で生活の質向上と再犯防止に取り組んでいるのか。今回は詳しい実情までは知ることができなかったが、今後連絡を取ってその実情を更に知ることとしたい。

この他、一般に受刑者が多いとされている先住民族や異民族の文化的背景を抑えるために、ヘルシンキとオスロのいずれにおいても国立文化博物館や民族博物館を参観した。9月14日(月)にヘルシンキ・バンター国際空港を経て、翌朝関西空港に帰国した。

今回の調査では、当初オスロ大学を再訪してニルス・クリスティ教授と再会することも目的だったが、残念なことに今夏亡くなられたために果たすことができな

かった。クリスティ教授は、ノルウェーが応報的刑事司法から修復的な司法へと転換していく上で大きな役割を果たされ、厳罰化の方向に進む日本の刑事司法のことを最期まで気にかけていたという。「憎しみを抱いて、いつまでも被害者の立場でいたいのですか」と述べられた穏やかな表情が忘れられない。この場を借りてご冥福を祈りたい。



面会する受刑者家族らを乗せてオスロ湾に浮かぶポストイ島の刑務所に向かうフェリー

# 国内研究調査報告

## 教如上人関係史料調査報告

教如上人研究 チーフ・准教授 平野 寿則

2015年度前期、教如上人研究班では3回の史料調査を実施した。いずれも研究課題である教如上人関連史料を所蔵する寺院、あるいは講中に赴いての調査である。

### 【光現寺調査 2015年6月19日(金)】

まず、2015年6月19日(金)に、滋賀県長浜市の真宗大谷派光現寺に赴き、調査を行った。光現寺は、寺伝によるともとは佛光寺系の寺院であったが、文亀2年(1502)、本願寺第9代・実如上人のころ、本願寺に転派したという。当寺には教如上人筆と伝わる「本願海」と墨書された一行物、および教如上人が親鸞聖人筆であることを裏書した、伝親鸞聖人筆十字名号を中心に、寺伝や由緒書、その他の法宝物について調書作成・撮影を行った。十字名号は絹本に籠文字で「帰命尽十方無碍光如来」の十字が墨書され、十字の下に蓮台が彩色で描かれており、佛光寺系寺院の名号本尊として伝来した可能性があると思われる。他の寺院でも確認されているが、教如上人は自筆の名号や寿像など以外に、その寺院に伝来した祖師・親鸞聖人筆と伝わる法宝物類の裏書を授与するというを行っている。このことは、従来の研究ではあまり明らかにされていないことであり、新たな知見が得られたものと考えられる。また、「廿四日御書講由来条々」なる史料も調査したが、それによれば、教如上人より授与された御書(消息)を、十四ヶ寺が共有して廿四日御書講という講が結ばれたとされる。このことは教如教団の形成を考えるうえで、非常に重要な手がかりとなるものである。

### 【春日谷五日講調査 2015年7月4日(土)～6日(月)】

2015年7月4日(土)～6日(月)には、岐阜県揖斐川町に所在する複数寺院が結成する「春日五日講」の調査を行った。春日五日講は、教如上人が関ヶ原合戦の折、石田三成方に追われて危難に陥った際、上人を匿い助けたという春日谷の寺院(当時は道場あるいは門徒たち)で構成される講である。江戸時代以来、現在に至るまで連続と教如上人の遺徳を偲ぶ法要を講中寺院(現在は8ヶ寺)が営み続けている。調査は五日講の「大寄」が行われる7月5日と6日に実施した。五日講では慶長11年(1606)に、教如上人より授与された教如上人寿像を「ゴホンブツサマ」と呼んでおり、この寿像をその時の法要執行会場となる寺院で奉懸して

法要が勤められる。教如上人寿像を中心に結集する講のあり方は、とりわけ美濃・伊勢などの地域に多く見られるもので、いずれの講も関ヶ原合戦などにおける教如上人の危難を救ったという伝承を共有している。寿像は法要が終わると嚴重に封印がなされるため、「大寄」などの法要で奉懸される時にしか実見できないものであり、今回もその機会にあわせて調査を実施することとなった。講中では寿像および、その後、寿像が傷んできたために新たに本山より授与された教如上人御影(これを講中では「オマエダチ」と呼ぶ)、そして『濃州粕川御直參御由緒帳』などの調査・撮影を行った。また、講中の全面的な協力を得て、講中の8ヶ寺すべての法宝物も調査させていただくこととなった。焼失などにより、ほとんど法宝物が残っていない場合もあったが、それぞれの寺院の寺としての成立時期や、「直參」(本山との間に上寺を介さない本山直属の寺院や僧侶)としての五日講の性格についても、解明する手がかりを得ることができた。両日とも2班に分かれ、およそ170点の法宝物を調査・撮影した。

### 【徳満寺調査 2015年7月20日(月)】

2015年7月20日(月)には、滋賀県長浜市の真宗大谷派徳満寺での調査を実施した。徳満寺は教如上人と音信関係を結んでいた蜂屋出羽守頼隆の遺子が入寺した寺院で、今回の調査では、教如上人裏書の方便法身尊像(阿弥陀如来立像絵像)、教如上人消息3通、顕如上人消息1通ほか、合計19点の法宝物について調査・撮影をした。顕如上人の消息もこれまで知られていなかったもので、岸和田城に入城した蜂屋頼隆に対して、門徒の参詣路次安全を顕如上人が求めた内容が確認できた。また、年欠5月15日付の蜂屋頼隆宛教如上人消息は、教如上人を退隠させた秀吉への取り成しを蜂屋頼隆に求める内容で、非常に重要な意味を持つ史料であることが明らかになった。教如上人を研究する際、とりわけ豊臣・徳川両政権との関係は避けて通ることのできない重要課題であるが、これまで紹介されていた史料だけでは不明な点も多いというのが現状である。そのような状況にあって、今回の徳満寺所蔵史料は重要な役割を果たすことになるものと考えられる。

以上、3ヶ所10ヶ寺の調査を行う中で、教如上人に関する史料が、従来いかに知られていなかったかを

痛感することとなった。教如上人研究班では、引き続き調査を進め研究の発展に寄与しうる成果を提出したいと考えている。



長浜市光現寺調査の様子

〔付記〕 いずれの調査も、各寺院のご住職、ご門徒の皆さまのご理解と全面的な協力のもと行うことができたものである。深く御礼を申し上げます。



春日谷五日講調査の様子



## 西方寺、清沢満之関連資料の調査報告

清沢満之研究 研究代表者・准教授 藤原 正寿

清沢満之研究では、本研究の目的である『清沢満之全集』（岩波書店）の補遺の発刊に向けて、2015年9月2日(木)、清沢の自坊である愛知県碧南市の真宗大谷派、西方寺へ赴き、刊行に向けての挨拶、および同寺院が管理する清沢満之記念館における所蔵資料閲覧を行った。西方寺には『清沢満之全集』（岩波書店）全九巻を旧清沢満之研究班から刊行した際に厚い協力を賜っており、今回、当研究班が新しい体制となったため、改めてその挨拶に伺い、今後の研究活動について報告する、というのが今回の調査の主な目的であった。参加者は、研究代表者の藤原正寿、庶務の西本祐攝以下、研究補助員の村上良顕、石原樹、それに加えて嘱託研究員の名畑直日兄氏に同行いただき、計五名での研究調査となった。新たに体制が整ってからは、研究班として西方寺へ赴くのは初めてのことであった。

当日は十三時ごろに西方寺に到着、本堂にて参詣を済ませた後、本堂内にある清沢の法名軸を拝見し、それについて西方寺坊守より説明を受けた。その際に、西方寺坊守より、今回の調査にあたり、その活動記録として寺院内および記念館内での撮影の許可を頂いた。

次に、西方寺境内にある清沢満之記念館において、肖像画、写真、年表、手記などの清沢関連の現存資料

を閲覧した。また、清沢直筆の『臘扇記』に関しては、西方寺からの配慮を賜り、箱の外からではなく、じかに閲覧することができた。さらに、記念館内の収蔵庫において、展示されている資料とは別に、全集に収録されていない末公開資料の所在を確認した。

次に、清沢満之関連の現存資料を閲覧した後、同施設の二階にて、西方寺住職に現在の研究活動の報告や、研究班で出版予定である『清沢満之全集』の補遺に掲載予定の資料についての具体的な相談をした。その後、句仏上人から清沢に宛てられた書簡二点と、清沢自筆の書簡数点、または当時の写真など、旧清沢満之研究班によって全集が刊行された以後に発見された貴重な資料を確認した。

最後に西方寺住職の案内のもと、清沢が実際に書斎として使っていたとされる部屋と、息を引き取ったとされる寝室を見学させていただき、一同は撤収することとなった。

今回の調査において、当研究班が今後の研究活動をするに際し、西方寺に対して活動の進捗状況や今後の方針などを報告・相談すること、及び今後の調査協力をお願いした。西方寺とは今後も可能な限り協力を賜り、細かく連絡を取り合うなどして、よりスムーズに研究活動を進めていきたいと考えている。



清沢満之記念館（一階）にて、展示資料を見学する一同と、資料が所蔵されている収蔵庫（写真・左奥）



清沢満之記念館（二階）にて、書簡等を確認

# 寺本婉雅関係資料調査報告

西藏文献研究 研究代表者・准教授 三宅 伸一郎

真宗総合研究所では2007年より村岡家（滋賀県竜王町）および宗林寺（富山県南砺市城端）より寺本婉雅（1872-1940）に関する資料を借用し、西藏文献研究班がその研究と整理にあっている。研究成果としては、

- ・高本康子・三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』31、2014年、pp.143-186。
- ・高本康子「大陸における対『喇嘛教』活動：寺本婉雅を中心に」『論集』（39）、2012年、pp.116-103。
- ・高本康子「寺本婉雅の大陸人脈：大谷大学所管資料を中心に」『印度学仏教学研究』63（1）、2014年、pp.532-528。

などが発表されているが、これらは日記や書簡を扱ったものであり、それ以外の資料については未だ十分な研究がなされていない。借用から7年以上という長い歳月が経ち、資料全体に対する総合的な研究をとりまとめるとともに、資料自体の今後についても真剣に考えねばならない時期となっている。そのために西藏文献研究班では、8月3日～7日にかけて集中的に、借用資料全体の調査・点検・撮影をおこなった。

そんな折、囑託研究員・高本康子氏より、寺本婉雅の孫にあたる寺本正氏が資料をお持ちで、その一部を高本氏自身が委託されているとの話を聞いた。村岡家および宗林寺より借用中の資料（以下それぞれ村岡家資料・宗林寺資料と略す）の評価のため、研究所当局の格別のご配慮により、鎌倉の寺本正氏宅と北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに出張し、それらの資料を実見することができた。

9月15日、高本氏とともに寺本正氏宅を訪問し、ご所蔵の寺本婉雅関連資料のうち現在お手元にあるものを拝見させていただいた。資料は、みかん箱大のプラスチック製コンテナ2点に収められていた。その内容は、寺本婉雅が出版した書籍、彼の論文の抜刷、チベット語文献等多岐にわたる。これとは別に、清朝の人士より送られた墨書類（軸装）が数点ある。

チベット語文献には、聖書のチベット語訳がある。村岡家資料にも、別の版ではあるが聖書のチベット語訳があり、関連性が窺える。また、表紙に「別138」のラベルが貼られているタシルンポ版のターラナータ

『インド仏教史』には、タシルンポ寺訪問の際入手した旨のメモ書きがあり、寺本婉雅のチベット語文献収集状況を知る上で貴重な資料といえる。論文の抜刷は、厚紙の表紙を付けて線装され、中には多くのメモ書きが見られた。同様の資料が複数、村岡家資料にも存在する。

10月15日～16日には、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに高本氏を訪れ、現在氏に委託されている資料を拝見した。その分量は、みかん箱大のダンボール2箱半に及び、内容も、日記、研究ノート、原稿、書簡、写真等貴重なものばかりである。

これらの資料のうち、とりわけ報告者の目を引くのは、日記と研究ノートである。日記の中には、『藏蒙旅日記』（横地祥原編、芙蓉書房、1874年）の原本となったと思われるものや、『黙働日誌』と題された晩年（1935～1940年）の日記が含まれている。後者は、当時の大谷大学の様子が記録されており、大学の歴史を知る上で貴重な情報を提供するものと思われる。研究ノートは、「Note Book of Tibetanism」と題されたクンプム寺滞在時（1903～1907年）に作成した3冊のものと、帰国後に作成したもので、翻訳のために『俱舍論』や『唯識三十頌』『中論無畏疏』のチベット語原文を筆写したものの2つに区分できる。特に注目すべきは前者である。それらは、仏教やボン教、チベットの歴史や文化の様々な事柄に関する英文による研究成果からの抜き書きによって構成されている。村岡家・宗林寺資料にも研究ノートは存在するが、用いられる英文は僅かである。寺本婉雅が、ヨーロッパを始めとする海外の先駆的な研究成果を参考にしながら研究を進めていたことがわかる貴重な資料である。また、このノートにおいてチベット文字は、ほとんどがウメー体（行書）で書かれていることにも注意したい。

以上のように、寺本正氏所蔵の資料は、村岡家資料および宗林寺資料との共通性があり、寺本婉雅関連資料として一連のものである。村岡家・宗林寺資料と合わせて寺本婉雅に対するこれまでの評価をおおきく覆す極めて重要な資料であるとの感を得た。

※なお、高本氏委託の資料については、同氏により「寺本婉雅関連資料の現在：寺本家資料を中心に」『論集』（41）、2014年、pp.126-111が発表されている。

# 公開講演会・公開研究会

## 『華夷譯語』出版記念 国際シンポジウム開催報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・講師 井黒 忍

2015年5月22日(金)に大谷大学博物館所蔵『華夷譯語(西番譯語四種猓獺譯語一種)』影印と研究(三宅伸一郎・松川節編著、大谷大学文献研究叢書、松香堂書店、2015年4月)の出版を記念する国際シンポジウムを響流館3階マルチメディア演習室にて開催した。なお、開会前に大谷大学所蔵『西番譯語』の内覧会を行い、終了後には懇親会を行った。司会は遠藤光暁教授(青山学院大学)が務めた。シンポジウムのプログラムは下記の通りである。

- 14:00 国際シンポジウム
- 14:05 開会の辞 松川節
- 14:15 更科慎一「日本における華夷譯語研究の現状」
- 15:00 孫伯君「傅斯年図書館蔵『松潘属包子寺等各西番譯語』初探」
- 15:45～16:00 休憩
- 16:00 池田巧「大谷大学所蔵本呂蘇(リュズ)譯語について」
- 16:45 三宅伸一郎「大谷大学所蔵『西番譯語』におけるチベット文字表記の特徴」
- 17:30 総合討論
- 18:00 閉会

シンポジウムにおいては、招聘した下記三名の講師および本学からの講師一名による講演が行われ、講演終了後には総合討論が行われ、質疑応答および情報交換がなされた。以下、各講演の概要を掲載する。

まず、更科慎一准教授(山口大学)の講演では、『華夷譯語』についてその種類と内容、包括語種について説明がなされ、次いで日本における『華夷譯語』研究の時代別の概観がなされ、その特徴が述べられた。さらに各本の研究の現状がまとめられ、今後の課題として、甲・乙・丙種本の音訳漢字の研究、『華夷譯語』中のもう一つの体音資料である百夷館及び緬甸館譯語の「来文」中の民族文字表記漢語の問題が提示され、語学学習書としての『華夷譯語』の性質に言及された。

次に孫伯君研究員(中国社会科学院民族学与人類学研究所)の講演では、台湾中央研究院傅斯年図書館蔵『松潘属包子寺等各西番譯語』の検討がなされた。その結果、これが中央研究院歴史語言研究所旧蔵の乾隆

十五年(1750)に編纂校定された十一種の「番書」シリーズに属しており、記録しているのは松潘地区で使用するチベット語の方言で、「松潘譯語」(川一)とした故宮抄本と内容が一致することが分かった。さらに故宮抄本と逐一照らし合わせを進めていくことで、この写本が故宮本と比べてより初編本に近いことが判明した。

次いで池田巧教授(京都大学)の講演では、丁種本西番譯語の諸本として故宮博物院所蔵『川番譯語』諸本および大谷大学博物館所蔵『西番譯語』諸本が紹介され、そのうちの『呂蘇譯語』に関して大谷本と故宮本が比較検討され、それぞれの特徴が述べられた。さらに、呂蘇譯語(川五)のチベット語、語彙項目、漢字音写について考察がなされた。

最後に三宅伸一郎准教授(大谷大学)の講演では、大谷大学博物館所蔵『西番譯語』の書体など文字表記に関する検討がなされた。まず、ウメー書体や縮略文字の使用に関する説明がなされた後、『泰寧属沈邊邊西番譯語』(川五)、『泰寧属木坪各村寨西番譯語』(川六)、『泰寧属明正司所管口外各西番譯語』(川七)、『建昌属木裡瓜別各西番譯語』(川九)のそれぞれの文字表記について具体例に基づく検討がなされるとともに、誤写に関する指摘がなされた。



孫伯君氏の講演

## 『Cultivating Spirituality』出版記念シンポジウム開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員 Michael J. Conway

国際仏教研究の翻訳研究の成果として、『*Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*』は、ロバート・ローズ研究員（本学教授）とマーク・ブラム囑託研究員（現カリフォルニア大学バークレー校教授）の共編のもと、2011年にニューヨーク州立大学出版より出版された。大谷派の近代教学者を代表する清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深の主要著作の英訳と簡潔な英文伝記が本書の中に収められている。長年に渡り手がけて完成した翻訳研究の主目的は、この四名の教学者の思想内容を英語で紹介することにあつたので、本書ではその思想の歴史的文脈と宗教的意義について踏み込んだ解説は行われていない。2011年から国際仏教研究では、本書に取り上げられている論考を明治・大正・昭和初期の宗教史に位置付けるとともに、その思想の意義を明確にすることを研究計画に掲げ、『*Cultivating Spirituality*』の姉妹編（companion volume）の出版に向けて研究活動を進めてきた。

今年の6月26日（金）・27日（土）にその努力が実り、『*On Cultivating Spirituality: The Significance of Modern Shin Buddhist Thought in the History of Religions*』（精神主義とは何か：宗教史における近代真宗教学の意義）というテーマで国際シンポジウムを開催することができた。シンポジウムでは、国内外から研究者を招聘し、基調講演者を含めて16名が研究発表を行い、また5名の先生から各セッションの発表に対する応答をいただいた。

『*Cultivating Spirituality*』の出版以来、国内外の学界において近代仏教に対する関心が高まり、それについての研究も著しく発展してきたことに鑑みて、6月26日のテーマを『*Seishin Shugi and Its Historical Context*』（精神主義とその歴史的な文脈）として設定し、宗教史の分野から精神主義運動を取り扱う発表を行うこととした。リチャード・ジャフィー氏（デューク大学准教授）が、『*Cultivating Spirituality on a Global Stage: The Case of Akegarasu Haya's Indo Busseki junpai ki*』（世界の舞台における精神主義：暁烏敏の『印度佛跡巡拝記』を事例として）と題する基調講演の後、幕末明治期から昭和初期の真宗と精神主義運動について三つのセッションが開かれた。

まず午前中に、明治期の真宗教団についてのセッションでは、岩田真美氏（龍谷大学講師）が『*The Encounter*

『*Between Buddhism and Western Thought: The Responses by Shin Buddhism in the Meiji Period*』（仏教と西洋思想の出会い：明治期の浄土真宗の対応）という題で発表した。そして、井上尚実研究員（本学准教授）は『*Kiyozawa Manshi and the Ōtani Denomination*』（清沢満之と大谷派教団）と題して、清沢満之の教育と活動に大きな影響を与えた石川俊台の意義を指摘した。マイケル・パイ囑託研究員（マールブルク大学名誉教授）はこの二つの発表に対して応答した。

午後の最初のセッションでは、清沢満之没後の精神主義運動を全体テーマとして、三つの発表が行われた。まずマイカ・アワーバック氏（ミシガン大学准教授）は、英語で精神主義が語られる時に今まで注目されてこなかった佐々木月樵の役割を指摘する発表（『*Sasaki Gesshō and the Foundations of Modern Doctrinal Studies in the Ōtani-ha*、佐々木月樵と大谷派における近代教学の基礎）を行った。そして福島栄寿氏（本学准教授）は、『*The Resurrection of Kiyozawa Manshi*（甦る清沢満之）』という題のもと、清沢満之が亡くなってから、その門下が追悼する際の語りがどのように変化していったかについて発表した。次に『*Voices of Buddhist Women in Modern Japan: A Representation of Female Spirituality in the Seishinkai*』（近代日本の女性仏教徒の声：『精神界』における女性の精神性の表象）という阿満道尋囑託研究員（アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授）の発表は、『精神界』紙上に見出される女性の言葉を紹介し考察した。最後にオリオン・クラウタウ氏（東北大学准教授）がこの三名の発表に対して応答した。

昭和初期の真宗と日本の仏教思想というテーマで開かれた次のセッションは、精神主義の思想家と日本で活躍した他の仏教思想家との関連を探った。ジェームズ・ドビンズ囑託研究員（オバーリン大学教授）は、長年、大谷大学で教鞭をとった禪家として著名な鈴木大拙と曾我量深の関係について、鈴木の日記などの史料に基づいて考察した（『*D. T. Suzuki and the Otani School of Seishin Shugi* 鈴木大拙と大谷の精神主義）。そして、メリッサ・カーリー氏（現オハイオ州立大学助教授）は、『*Sincerity of Spirit: Seishin Shugi's Influence on Tanabe Hajime*』（誠実な精神：精神主義

が田邊元に及ぼした影響」という題で、京都学派の浄土教思想と精神主義の関係性について論じた。南山大学宗教研究所のジェームズ・ハイジグ氏は応答者を務めた。

精神主義の思想的意義をテーマに掲げ、27日(土)のプログラムは、基調講演と二つの研究発表セッションで組まれた。基調講演は、Soga Ryōjin's Understanding of Merit-transference (曾我量深の回向理解)と題して、長谷正當氏(京都大学名誉教授・本学元教授)によってなされた。氏は曾我の回向理解に照らせば、merit transferenceは回向の訳語として相応しくなく、the Tathāgata's transformation (如来の変容)として翻訳すべきと論じた。

午前中の研究発表は清沢満之の思想の意義を明確にしようとするものであった。西本祐攝氏(本学講師)は、The Incorporation of the *Tannishō* in Kiyozawa Manshi's Thought (清沢満之の思想における『歎異抄』の受容)で発表し、マーク・ブラム嘱託研究員は清沢の思想と真宗教団の中で展開された真俗二諦論との関係について発表した(Kiyozawa Manshi and the Two-Truth Discourse of the Late Edo and Meiji Periods、清沢満之と幕末明治期の真俗二諦論)。山本伸裕氏(東京医療保健大学講師)はWhat Was *Seishin Shugi*? Kiyozawa Manshi and the People of the Kōkōdō (精神主義とは何だったのか:清沢満之と浩浩洞の人々)において、清沢満之の著述とされてきた文章の真否を問う近年の著書の内容を英語で紹介した。

午後の研究発表のセッションは、曾我量深と安田

理深の思想についての発表から構成された。先ずThe *Ālayavijñāna* in Soga Ryōjin's Theory of Dharmākara Bodhisattva (曾我量深の法藏菩薩論における阿頼耶識について)という題のもと、筆者は曾我の「如来表現の範疇としての三心観」について考察した。次にロバート・ローズ研究員は、A Modern Shin Buddhist Understanding of Buddhist History: *Soga Ryōjin's Shinran's View of Buddhist History* (仏教史の近代真宗の把握:曾我量深の『親鸞の仏教史観』)と題して、*Cultivating Spirituality*にその英訳が収められている『親鸞の仏教史観』について論じた。そして加来雄之氏(本学教授)は安田理深の思想の特徴を「如来内存在」という語に見据え、その主体論について発表した(Being within the Tathāgata: The Laying of the Foundations of the Religious Subject (Faith) in Yasuda Rijin's Thought、如来内存在:安田理深における宗教的主体〔信心〕の基礎づけ)。最後に、木越康氏(本学教授)が応答した。

基調講演を除いて、各セッションには質疑応答の時間が設けられ、発表に対する議論がなされた。そして、全日程の最後に全体討論の機会が設けられ、ローズ研究員の司会のもと活発な議論が交わされ、発表者・応答者、そして来聴者の間に課題が共有され、様々な疑問が解消された。

発表者には、これらの議論を踏まえて発表原稿の修正をお願いし、今後、それらの論文を一つの論集に編纂して*Cultivating Spirituality*の姉妹編として出版する予定である。



全体討論の様子。ジェームス・ハイジグ氏中央



長谷正當氏の基調講演

# 国際仏教研究 井内真帆博士の公開講演会 開催報告

## －スーパーグローバル！？日本人研究者のチベット研究－

国際仏教研究 研究補助員・仏教学専攻博士後期課程第二学年 梶 哲也

4月14日(火)、本学響流館マルチメディア演習室に神戸市外国語大学客員研究員の井内真帆博士をお招きし、「スーパーグローバル！？日本人研究者のチベット研究—これまでの研究で得られた経験と実感から—」(Tibetan studies in a global context: What is the advantage of Japanese scholars in Tibetan studies?)という講題のもと、真宗総合研究所国際仏教研究英米班の2015年度第1回公開講演会が開催された。本学において2007年度に博士(文学)の学位を取得され海外における研究経験の豊富な井内博士による講演には、将来、研究者として自立を目指す大学院生を中心に多くの聴衆が集まり、そのお話に耳を傾けた。

井内博士は、本学博士課程在学中に中国やチベット本土等で研究活動を行い、学位取得後にはハーバード大学や、中国・西南民族大学において研究活動を行った経験を持つ。昨今、国際競争力が日本の高等教育・研究分野における課題の1つとなっているが、博士は自身の国際的な研究活動から、日本のチベット研究、仏教研究が、人文学系分野における国際的な競争に耐えうる数少ない分野の1つであると感じたそうである。

その理由としては2つある。まずは、両研究がそもそもチベット・インド・中国を中心とし、日本も含めた東アジア全体をその対象とする国際的な研究であり、領域も言語学・文学・宗教学など多岐にわたる学際的なものだからである。そして、日本のチベット研究・仏教研究には明治以降、継続して盛んに行われている歴史があり、国内に日本チベット学会や印度学仏教学会といった個別の学会を組織する。このように国内に両研究に関する個別の学会を持つ国は世界的に見ても稀であり、自国が持つ厚く深い研究成果に母国語でアクセスできる日本人研究者は、国際的に見ても優位性を持つからである。

こうしたアドバンテージを持つ日本の若手研究者が

海外において研究を行うメリットについて、博士は次のように話された。まず両研究に関しては日本国内で世界に通用するレベルまで基礎的な研究能力を身につけることができる。この土台の上にある国外での研究経験は、より速やかに世界の研究状況を正確に把握し、視野や人脈、その後の研究分野・活動を広げることを可能とする。

最後に、自立した研究者として研究を継続するための、具体的な研究資金獲得についてお話して下さった。研究資金を調達することが目的ではない。しかし、資金を獲得した上で研究成果を出すことが自身の実績となり、それがまた次の研究資金の調達に繋がり研究の継続が可能となる。そして、このサイクルの節目における成果報告が、自身の研究内容を整理し方向性と価値とを自ら確認する機会となり、よりよいターゲットの設定に活かされる。

今回、博士は聴講する大学院生に対して、自ら得た経験を基にチベット研究・インド研究の日本人研究者の優位性と海外経験の重要性、研究実績の積み上げと継続の大切さをお話し下さった。本学の先輩である井内博士の貴重な助言を胸に、世界に通用する自立した研究者を目指したいと思う。



井内博士の講演の様子

# 学術交流協定に基づく共同研究

## 中国社会科学院歴史研究所との公開研究会

国際仏教研究（東アジア班）研究員・講師 井黒 忍

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、2015年7月8日(木)に真宗総合研究所ミーティングルームにおいて中国社会科学院歴史研究所より王震中副所長、徐義華研究員、張国旺副研究員を招聘して公開研究会を開催した。各報告の概要については下記の通りである。

王震中「中国王権的誕生——兼論夏商周三代複合制国家結構」では、中国の古代王朝における王権の問題が検討された。夏・殷・周三代の国家構造の問題に関して、従来は夏・殷・周を「統一された中央集権制国家」とみなすか、あるいは三代の各王朝を多くの「平等な」邦国によって構成する連盟だとみなす考え方が一般的であった。しかしながら、これら両者ともに問題点を残すものであるため、報告者は夏・殷・周三代の王朝は複合制国家構造だとする新たな定義を行う。複合制とは王朝内に王邦と王に従属する諸侯邦国の二つがともに存在することを指す。これによれば、夏は夏后氏とその他の夏王に従属する諸侯邦国によって構成され、殷は「内服」の地の王邦と「外服」の地の侯伯など諸侯邦国によって構成され、西周は王畿に位置する周邦と四方に分かれた諸侯邦国によって構成されることになる。そこでは王国は「国上の国」、諸侯邦国は「国中の国」であり、ともに王を「天下共主」とする不平等な構造関係の中に置かれたと考えられる。

徐義華「中国最早的分家記録——西周琏生三器試析」では、重要な学術的価値を有し、多くの研究者の関心を集めてきた琏生三器（五年琏生簋・五年琏生尊・六年琏生簋）の分析が行われた。琏生三器の銘文に関する従来の見解は大きく二つに分かれ、一つはこれが記録するのは訴訟事件であるとするものであり、もう一つは宗族内部の財産分割であるとするものであった。銘文中の鍵となる「獄」の字は「要」あるいは「約」という意味であることから、これは契約の類の文書を指すこととなる。もう一つの「辱」の字の意味は、あ

る種の文書を作成することであり、文書そのものを指す場合もある。琏生三器銘文の内容の検討を通して、琏生三器は分家記録で訴訟とは無関係で、その内容から西周の宗族制度を研究できることが判明した。

張国旺「近年来中国大陆元代佛教研究総論」では、20世紀以降の元代仏教に関する中国での研究状況がまとめられた。20世紀における元代仏教に関する研究としては、陳高華の漢地仏教に対する研究、楊訥の白蓮教に対する研究、孫克寬と丁国範の白雲宗に対する研究、温玉成の大頭陀教（糠禪）に対する研究が最も注目される。21世紀に入ると、豊富な資料に基づいて元史研究が推進されたことにより、元代仏教に関しても豊富な成果が生み出されてきた。任宜敏『中国仏教史・元代卷』、陳高華・張帆・劉曉『元代文化史』、李鳴飛『蒙元時期的宗教変遷』などの全般的な研究があり、また怡学主編『元代北京仏教研究』など地域を限定した専著、楊曾文『宋元禪宗史』など宗派を限定した専著もあらわれた。さらに『勅修百丈清規』、『楚石北游詩』などの元代仏教典籍、『邢台開元寺金石志』や『北京仏教石刻』などの碑刻資料の整理・出版が相次ぎ、大いに元代仏教史研究が推進された。



徐義華氏の報告

# 公開講演会開催報告

## －モンゴル国立大学社会科学部考古学科教授エルデネバト先生を招聘して－

西藏文献研究 研究員・准教授 武田 和哉

本学真宗総合研究所とモンゴル国立大学社会科学部（現在は総合科学学部と改称）との学術交流協定に基づく共同研究活動は、今年度は最終年度の3年目となり、一昨年度のM.ガントヤー先生（仏教学）、昨年度のデルゲルジャルガル先生（歴史学）に引き続き（お二方の講演内容は『真宗総合研究所研究紀要』第31号および『研究所報』No.65にて報告済）、今年度は考古学科のU.エルデネバト先生を本学にお招きし、共同研究を実施した。その際には、国内の研究者も併せてお招きして、下記の日程で公開講演会を開催したので、以下に報告する。

### 1. 公開講演会開催の日時と場所

2015（平成27）年5月24日（日） 14:00～17:00

大谷大学博綜館五階・第五会議室

### 2. 講演者とテーマ

U.エルデネバト先生（モンゴル国立大学社会科学部考古学科教授）「モンゴル国における近年の考古学的発掘とその成果」

村上智見先生（帝塚山大学文学部非常勤講師）「オロンドヴ遺跡出土織物について」

### 3. 講演会の概要

エルデネバト先生は、モンゴル考古学をご専門にされており、この日はモンゴル国内で近年に発見された重要な考古学的成果と知見についてご講演を頂いた。モンゴル国内では、現在日本をはじめとして複数の国とモンゴル国の研究機関が共同で数多くの発掘調査を実施しており、重要な発見が相次いでいる。エルデネバト先生もドイツなどとの共同調査を手がけておら

れ、今回のご講演では、発掘調査時の遺跡・遺物に関する写真をおし頂きつつ、その発見の意義や今後の展望等についても懇切なる説明を頂いた。

また、エルデネバト先生のご講演のなかで紹介がなされたオロンドヴ遺跡に関しては、そこから出土した遺物の織物に関する研究成果について、村上智見先生からご報告を頂いた。村上先生は、広く中国などの出土事例などとも比較検討をしつつ、この織物の製作技法や生産地に関する考察を行い、見解を提示して下さった。

これらの講演・研究報告に関して、参加者側の関心はすこぶる高く、数多くの質問や意見が寄せられるなど、総じて活発な意見交換の場となった。

講演会終了後は、真宗総合研究所主催の懇親会が開かれ、ここでも参加者による研究交流等がなされた。

### 4. 講演会の主要な参加者の氏名

松田孝一（大阪国際大学名誉教授）・白玉冬（内蒙古大学蒙古学学院副教授）・船田善之（九州大学文学部講師）・齊藤茂雄（大阪大学特任研究員）・坂本俊（奈良大学研究生）・包慕萍（東京大学研究員）、岡本真祐子（元JICA協力隊員）、塚本和人（朝日新聞樫原支局長）、オユントルガ（奈良大学大学院生博士課程）〔以上は外部参加者〕。

松川節（真宗総合研究所所長・本学人文情報学科教授）三宅伸一郎（本学人文情報学科准教授・西藏文献研究班研究代表者）・清水洋平（本学非常勤講師・西藏文献研究班嘱託研究員）・武田〔以上は学内参加者〕



エルデネバト先生（右）と通訳を担当した松川所長



公開講演会の状況



## ツルティム・ケサン（白館戒雲）先生全集出版記念報告

西藏文献研究 研究代表者・准教授 三宅 伸一郎

2014年、中国四川省成都の四川民族出版社からツルティム・ケサン先生（白館戒雲・大谷大学名誉教授）の全集が出版された。先生が発表・出版された数多くの御業績の中から、チベット語による著作を選び、10巻11冊にまとめたものである。

*Khang dkar tshul khrims skal bzang mchog gi gsung 'bum* (康嘎楚称格桑全集). Chengdu: Si khron dus deb tshogs pa si khron mi rigs dpe skrun khang(成都:四川党建期刊集团四川民族出版社), 2014.

先生のこうしたチベット語による著作の一部は、すでに北京の中国蔵学出版社から「選集」という形でまとめられ出版されていた (*Khang dkar tshul khrims skal bzang gi gsung rtsom phyogs bsgrigs*. Beijing: Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1999)。この「選集」を通じ、その高水準の研究成果の一端に触れた多くのチベット人学生や研究者たち—特に中国国内に居住する人たちは、「選集」に収められていない先生の他の著作を渴望していた。しかし、その多くが日本で出版されていたため中国国内に広く流通せず、人づてに渡った一部のものから何度もコピーが重ねられ製本されたものを、現地の学生たちが貪るように読んでいたのを何度も目にすることがある。今回の「全集」出版の第一の意義は、こうした人たちに、先生の学識に浴することを容易にした点にある。

以下、本全集の収録内容を示す。なお紙幅の都合により、収録されている著作の題名の日本語訳を示すにとどめ、チベット語による題名は省略する（作成にあたっては本学図書館の蔵書データを参考にした）。

- Vol.1  
『インド論理学・認識論の発展と論理学・認識論の歴史』『ツルティム・ケサン略伝』
- Vol.2  
『瑜伽行派と中観派の諸問題』
- Vol.3  
『インド密教思想史』
- Vol.4  
『弥勒法の研究「未了義了義論」の麗飾』
- Vol.5-1, 5-2  
『インド仏教思想史』

- Vol.6, 7  
『『菩提道次第大論』の典拠を明らかにしたもの』
- Vol.8  
『『菩提道次第小論』の典拠を明らかにしたもの』
- Vol.9  
『アビダルマ文献における思想の展開』『アビダルマ概説』『般若心経語釈』『六字真言とヨンテン・シギルマ (Yon tan gzhi gyur ma) に対する解説』『日本仏教史』『チベット語訳『歎異抄』』
- Vol.10  
『チベット歴史文化研究』『古代チベット仏教史』

70歳を越えた現在も先生は研究を進め、パソコンに向かい執筆し、その研究成果を発表している。近年の著作『チベット古代史研究選集・雪国の十万の光 (*Bod kyi gna' rabs lo gyur bdams btus gangs ljongs 'od 'bum*)』(2014年)や、本研究所紀要第20号に掲載されたチベット大蔵経に関する論考等は今回未収録である。今後続編が刊行され、これらも収録されることを期待したい。

本全集は、先生の著作を単に複製したものではなく、コンピューターに入力し版を新たにしている。専門的な用語が用いられ、また各所にサンスクリット語のローマ字表記などが挿入された先生の著作を、新たに入力・校正・編集し出版にこぎつけるためには、並外れた努力が必要であったと容易に想像される。この困難な事業を担ったのが、編者である西南民族大学のブムチャブ ('Bum skyabs) 教授である。編者によるあとがきには、2012年8月、北京で開催された国際チベット学セミナーの後、先生を成都にお招きし、15日間、朝から晩まで先生と顔つき合わせながら校正をおこなったと、苦勞の様子が記されている。この長年の努力に対し、感謝したい。

ブムチャブ教授の来日に合わせ、2015年4月4日(土)、学内ビックバレー・カフェにおいて出版記念祝賀会が開催された。告知に十分な時間を割くことができず、また、年度初めの多忙な時期にもかかわらず、草野顕之学長をはじめ、御牧克己先生(京都大学名誉教授)や北村太道先生(種智院大学名誉教授)ら先生と縁の深かった学内外の多くの方々の参加を得て、盛会のうちに終了した。ブムチャブ教授からは、出版に至った経緯の説明、勤務先である西南民族大学図書館の紹介がなされた。

真宗総合研究所彙報 2015. 5. 1 ~ 2015. 10. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2015年6月4日(木) 12:20~12:50 (博綜館 第5会議室)

1. 特別研究員の人事について
2. 2015年度研究組織について
3. その他  
(1) 編集委員会の起ち上げについて  
(2) 研究員総会について  
(3) その他

◇2015年7月2日(木) 12:20~12:50 (博綜館 第5会議室)

1. 紀要の編集および投稿ガイドラインについて
2. その他

◇2015年9月28日(月) 12:20~12:50

1. 特別研究員の解任・新規委嘱について
2. 研究組織の変更について  
・ 西藏文献研究嘱託研究員の追加  
・ 所属機関変更に伴う一般研究班の発足  
・ 科研費採択に伴う一般研究班の発足
3. 報告事項  
・ 研究紀要第33号任意投稿申請者  
・ 一般研修員の研究所施設利用について
4. その他

◇2015年10月12日(月) 12:20~13:10 (博綜館 第5会議室)

1. 客員研究員の委嘱について
2. 研究組織の変更について  
・ 国際仏教研究嘱託研究員の追加
3. その他  
(紀要編集委員会)

1. 『研究紀要33号』の編集について
2. その他

○2015年度第1回研究員総会

◇2015年7月30日(木) 17:00~18:00 (真宗総合研究所内ミーティングルーム)

1. 研究活動におけるコンプライアンスについて
2. 研究所内の整理 (図書・個人ロッカー) について
3. 研究班の事務について

4. 次年度の事業計画作成における留意点について
  5. その他意見交換
- 懇親会 18:00~ (Big Valley Cafe)

教如上人研究

【研究会】

◇徳満寺調査事前打ち合わせ

日時: 2015年5月11日(月) 13:00~15:30

場所: 至誠館2F S219個人研究室 (川端研究室)

内容: ①大桑齊嘱託研究員による徳満寺関係史料に関わる事前調査・検討内容の共有  
②徳満寺調査の今後の対応と、別の調査についての打ち合わせ

参加者: 大桑齊・川端泰幸

◇第7回研究会

日時: 2015年5月27日(水) 16:30~18:00

場所: 真宗総合研究所ミーティングルーム

内容: ①研究報告 川端泰幸氏「教如と織豊武士団」  
②光現寺調査予定の調整・検討  
③春日谷五日講調査予定の調整・検討

参加者: 老泉量・大桑齊・川端泰幸・草野顕之・平野寿則・百武涼子・福島栄寿・星津香美・山田哲也

【調査】

◇2015年6月19日(金) 13:00~17:30

場所: 真宗大谷派光現寺 (滋賀県長浜市)

内容: 教如上人裏書の伝親鸞筆十字名号ほか、教如上人関連資料の調書作成・撮影

参加者: 老泉量・大桑齊・川端泰幸・東館紹見・平野寿則・百武涼子・星津香美

◇2015年7月4日(土)~6日(月)

場所: 春日谷五日講 (岐阜県揖斐川町) および講中寺院 (発心寺・寂静寺・西藏寺・長光寺・遍光寺・法性寺・明随寺)

内容: 教如上人寿像ほか、関連資料の調書作成・撮影

参加者: 老泉量・大桑齊・川端泰幸・工藤克洋・東館紹見・平野寿則・百武涼子・廣瀬啓

◇2015年7月20日(月) 13:00~17:00

日 時：真宗大谷派徳満寺（滋賀県長浜市）  
 内 容：教如上人消息ほか、関連資料の調書作成・撮影  
 参加者：老泉量・大桑齊・川端泰幸・東館紹見・平野寿則・百武涼子・星津香美

### 清沢満之研究

#### 【ミーティング】

##### ◇第1回ミーティング

日 時：2015年6月30日(火) 18:00～19:00  
 出席者：藤原正寿、西本祐攝、村上良顕、石原樹  
 会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：今年度の活動方針の確認

##### ◇第2回ミーティング

日 時：2015年7月13日(月) 12:10～13:00  
 出席者：藤原正寿、西本祐攝、村上良顕、石原樹、百武涼子、工藤克洋

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：長徳寺蔵資料翻刻作業の進捗状況の確認

##### ◇第3回ミーティング

日 時：2015年8月28日(金) 16:30～17:30

出席者：藤原正寿、西本祐攝、村上良顕

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：西方寺出張の日程確認

研究会開催にむけた方針の策定

#### 【出張】

日 時：2015年9月2日(水)

出席者：藤原正寿、西本祐攝、名畑直日児、村上良顕、石原樹

場 所：真宗大谷派西方寺

目 的：『清沢満之全集』補遺刊行にむけた挨拶

清沢満之記念館所蔵資料閲覧

### 国際仏教研究

〈英米班〉

#### 【会議】

##### ◇真宗大谷派北米真宗センターとの打ち合わせ

2015年5月11日(月) 10:40～12:00 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

##### ◇国際仏教研究 全体ミーティング

2015年5月13日(水) 14:40～16:00 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

##### ◇英米班後期活動計画ミーティング

2015年9月11日(金) 16:20～18:00 (於 真宗総合

研究所内ミーティングルーム)

##### ◇Otani-ELITE 第2回合同Symposium 準備ミーティング

2015年9月25日(金) 14:30～15:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

##### ◇国際研前期活動報告及び後期活動計画ヒアリング

2015年9月25日(金) 16:30～17:30 (於 真宗総合研究所内事務室)

##### ◇国際研2016年度活動計画ヒアリング

2015年11月11日(水) 9:45～10:30 (於 真宗総合研究所内事務室)

##### ◇Cultivating Spirituality 出版記念シンポジウム準備会議

2015年5月1日(金) 16:30～17:50 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

2015年5月27日(水) 13:00～14:30 (於 真宗総合研究所内フリースペース)

2015年6月5日(金) 16:30～17:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

2015年6月22日(月) 18:00～19:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

2015年6月23日(火) 16:30～18:00 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

#### 【研究会】

##### ◇『浄土の真宗』翻訳研究会

2015年7月1日(水) 13:00～14:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

##### ◇IASBS大谷大学パネル発表準備研究会

2015年7月11日(土) 18:00～19:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

##### ◇IAHR大谷大学パネル発表等準備研究会

2015年6月30日(火) 18:00～19:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

2015年7月28日(火) 17:30～19:30 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

#### 【国際シンポジウム開催】

##### ◇Cultivating Spirituality 出版記念シンポジウム

2015年6月26日(金)～27日(土) 於 メディアホール(響流館3階)

#### 【海外学会参加】

##### ◇国際真宗学会第17回学術大会

2015年8月5日(水)～12日(水) 於 米国カリフォルニア州パークレー市仏教大学院

(パネル発表：井上尚実研究員、加来雄之教授、マ

イケル・コンウェイ研究員、西本祐攝講師)

◇国際宗教学宗教史学会第21回学術大会 (ドイツ・フランス班と協同)

2015年8月24日(月)～28日(金) 於 ドイツ、テューリンゲン州エアフルト大学

(パネル発表:木越康教授、マイケル・コンウェイ研究員、新田智通講師、マイケル・バイ嘱託研究員、藤枝真研究員、ロバート・ローズ研究員)

#### 【公開講演会】

◇2015年7月14日(火) 16:20～17:50 於 マルチメディア演習室 (響流館3階)

講師:ジョン・ロブレグリオ氏 John LoBreglio (オックスフォード・ブルックス大学)

講題:「パリ講和会議と20世紀初頭の帝国主義に対する日本の仏教者の視点」Japanese Buddhist Perspectives on the Peace Conference and Early Twentieth-Century Imperialism

◇2015年10月2日(金) 16:20～17:50 於 マルチメディア演習室 (響流館3階)

講師:ムダガムウェ・マイトリムルティ博士Dr. Mudagamuwe Maithrimurthi (ハイデルベルク大学)

講題:「仏教思想における慈(マーイトリ)と悲(カルナー)の概念の重要性と関連性」Significance and Relevance of Benevolence (*maitī*) and Compassion (*karuṇā*) in Buddhist Thought

(ドイツ・フランス班)

#### 【海外学会参加】

◇国際宗教学宗教史学会第21回学術大会 (英米班と協同)

2015年8月24日(月)～28日(金) 於 ドイツ、テューリンゲン州エアフルト大学

(研究論文発表:藤枝真研究員、パネル応答者:マイケル・バイ嘱託研究員)

(東アジア班)

#### 【国際シンポジウム開催】

◇大谷大学博物館所蔵『華夷譯語』出版記念国際シンポジウム

2015年5月22日(金)に大谷大学博物館所蔵『華夷譯語(西番譯語四種猺獠譯語一種)』影印と研究の出版を記念する国際シンポジウムを開催した。

・更科慎一(山口大学)「日本における華夷譯語研究の現状」

・孫伯君「傅斯年図書館蔵『松潘属包子寺等各西番

譯語』初探」

・池田巧「大谷大学所蔵本呂蘇(リュズ)譯語について」

・三宅伸一郎「大谷大学所蔵『西番譯語』におけるチベット文字表記の特徴」

#### 【共同研究・公開講演会】

◇中国社会科学院歴史研究所の共同研究

2015年7月6日(月)～10日(金)に王震中副所長、徐義華研究員、張国旺副研究員の三名を招聘し、本学にて研究活動を行うとともに、7月8日(水)には下記の公開研究会を開催した。

・王震中「中国王権の誕生——兼論夏商周三代複合制国家結構」

・徐義華「中国最早の分家記録——西周珣生三器試析」

・張国旺「近年来中国大陸元代佛教研究総論」

#### 西蔵文献研究班

##### 【嘱託研究員招聘】

◇5月19日(火)～26日(火)

U.エルデネバト氏(モンゴル国立大学社会科学部考古学科教授・西蔵文献研究班嘱託研究員)

招聘理由:チベット仏教伝来以前のモンゴル高原地域での諸民族の活動の諸相および仏教受容の可能性についての共同研究、および交流活動

◇8月5日(水)～7日(金)

高本康子氏(西蔵文献研究班嘱託研究員)

招聘理由:寺本婉雅研究に係る資料実見・整理作業および打ち合わせ

##### 【公開講演会】

◇5月24日(日) 14:00～17:00(博綜館五階・第五会議室)

U.エルデネバト氏(モンゴル国立大学社会科学部考古学科教授)

「モンゴル国における近年の考古学的発掘とその成果」

村上智見氏(帝塚山大学文学部非常勤講師)

「オロンドヴ遺跡出土織物について」

##### 【出張】

◇6月13日(土)

場所:村岡利一氏宅(滋賀県蒲生郡竜王町)

目的:御礼のご挨拶および借用資料に関するご相談

出張者:松川節・三宅伸一郎・武田和哉・藤田義孝

◇9月26日(土)

場所: 宗林寺 桂恵子氏 宅(富山県南砺市)  
目的: 御礼のご挨拶および借用資料に関するご相談  
出張者: 松川節・三宅伸一郎・武田和哉・藤田義孝

【調査】

◇8月3日(月)～7日(金)

場所: 真宗総合研究所  
目的: 寺本婉雅関係借用資料(村岡家分・宗林寺分)に係る調査整理および点検作業等  
従事者: 三宅伸一郎・武田和哉・藤田義孝・清水洋平・高本康子・松川節・松下賀和・上田佳子・ラモジヨマ・ボルマー

◇9月15日(火)～16日(水)

場所: 寺本正氏宅(神奈川県鎌倉市)  
目的: 寺本婉雅関係資料の調査のため  
出張者: 三宅伸一郎・高本康子(嘱託研究員)

◇10月15日(木)～16日(金)

場所: 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター  
目的: 寺本婉雅関係資料の調査のため  
出張者: 三宅伸一郎

【研究員打ち合わせ】

場所: 真宗総合研究所ミーティングルームほか  
内容: 研究班の運営・企画・諸問題に関する調整  
開催日: 5月27日(火)、6月24日(火)、7月8日(水)、  
7月22日(水)、8月3日(月)、9月3日(木)、  
9月24日(木)、10月8日(木)、10月27日(火)

【実務作業担当者ミーティング】

場所: 真宗総合研究所西藏文献研究班ブースほか  
内容: 研究班の実務および作業実施に関する調整等  
開催日: 5月28日(水)、6月25日(水)、7月23日(木)、  
8月3日(月)、9月24日(水)、10月14日(水)、  
10月28日(水)

ベトナム仏教研究

【日本仏教概説執筆のための連絡会】

◇2015年6月2日(火) 16:20～

場所: 研究所内ミーティングルーム  
『日本仏教概説』執筆状況の確認・意見交換を行った。  
出席者: 織田、福島、平野、川端、箕浦

◇2015年9月22日(火) 16:20～

場所: 研究所内ミーティングルーム  
前回に引き続き再度『日本仏教概説』執筆状況の確

認・意見交換を行った。

出席者: 平野、福島、川端、ローズ、織田、箕浦

【研究打合せ】

◇2015年10月14日(水) 16:30～

場所: 織田研究室  
ベトナム寺院調査について、『ベトナム仏教概説』『日本仏教概説』について意見交換した。  
出席者: 織田、箕浦、大西

◇2015年10月17日(土) 18:00～

場所: 織田研究室  
ベトナム寺院調査について、『ベトナム仏教概説』『日本仏教概説』について意見交換した。  
出席者: 織田、箕浦、大西

◇2015年10月22日(木) 16:30～

場所: 大西客員研究員室  
ベトナム寺院調査について、『ベトナム仏教概説』について意見交換した。  
出席者: 織田、大西

◇2015年10月23日(金) 18:30～

場所: 大西客員研究員室  
ベトナム寺院調査について、『ベトナム仏教概説』について意見交換した。  
出席者: 織田、大西

◇2015年10月27日(火) 16:30～

場所: 織田研究室  
ベトナム寺院調査について打合せを行った。  
出席者: 織田、箕浦、大西、グエン・ヒュー・スー

【懇談】

◇2015年10月20日(火) 19:00～

大西和彦研究員と懇談した。研究の現状と今後の展望について意見交換した。  
出席者: 松川、松浦、織田、箕浦、大西、滝川

【グエン・ヒュー・スー氏講演会】

◇2015年10月28日(水) 16:30～

講演題目: ベトナム仏典刊行略史—永厳寺所蔵木版を中心として—  
場所: マルチメディア演習室  
講演会終了後学内カフェにて懇親会を開催した。

## 大谷大学史資料室

### 【研究会参加】

- ◇全国大学史資料協議会 西日本部会 2015年度総会・第1回研究会

日程：2015年5月20日(水)

場所：大阪工業大学（大宮キャンパス）OITホール

参加者：松岡智美

- ◇第95回全国大学史資料協議会東日本部会研究会

日程：2015年7月16日(水)

場所：明治大学博物館特別展示室（地下1階）、A3・

A3会議室（2階）

明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン

参加者：松岡智美

- ◇全国大学史資料協議会 西日本部会 2015年度第2回研究会

日程：2015年7月22日(水)

場所：和歌山大学 附属図書館/紀州経済史文化史研究所

参加者：松岡智美

### 【ミーティング】

- ◇2015年6月1日(月) 14:00～16:00

出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美

場所：真宗総合研究所

内容：2015年度の活動計画の確認、業務報告など。

- ◇2015年8月6日(水) 13:00～15:00

出席者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美

場所：真宗総合研究所

内容：2015年度前期の業務報告と今後の活動について。

### 【大谷大学史資料室スポット展示関係の作業】

- ◇2015年7月15日(水) 14:00～16:00

タイトル：「大谷大学～東京編～」

参加者：松浦典弘・戸次顕彰・松岡智美

場所：大谷大学図書館入口展示スペース

- ◇2015年7月30日(水) 14:00～16:00

「大谷大学～東京編～」の展示追加作業

参加者：戸次顕彰・松岡智美

場所：大谷大学図書館入口展示スペース

- ◇2015年9月16日(水) 14:00～16:00

「大谷大学～東京編～」の展示撤収作業

参加者：戸次顕彰・松岡智美

場所：大谷大学図書館入口展示スペース

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

### 人事

#### ■客員研究員

□新規採用（2015年10月1日付）

#### \*赤尾栄慶

現職：京都国立博物館・名誉館員

研究期間：2015年10月1日～2016年3月31日

#### ■特別研究員

□新規採用（2015年8月28日付）

#### \*田鍋良臣

現職：任期制助教

研究期間：2015年8月28日～2017年3月31日

研究課題：ハイデッガー「黒ノート」の研究——「計算的思考」の分析を中心に

#### \*藤原美沙

現職：任期制助教

研究期間：2015年8月28日～2017年3月31日

研究課題：シュティフターとシュトルムの文学における「障がい児」像

□解任（2015年7月31日付）

中井信介

大谷大学文献研究叢書  
『華夷譯語（西番譯語四種 猓羅譯語  
一種）』影印と研究』を出版

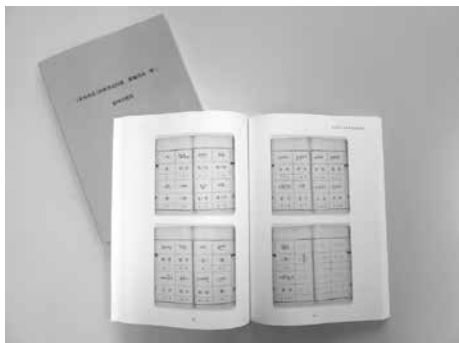
このたび、本学所蔵資料を学内外の研究者及び研究機関に公開し、学術資源としての活用を促進することを目的に、『大谷大学文献研究叢書』を刊行することになりました。

2015年4月、本学博物館所蔵『華夷譯語（西番譯語四種 猓羅譯語一種）』の影印及び研究成果を、本叢書の第1巻として出版いたしました。『華夷譯語』とは、中国の明・清時代に編纂された、漢語と中国周辺部に居住する少数民族の言語との対訳語彙集のことで、当時の言語構造や発音、漢語訳を知る上で貴重な資料です。

本学所蔵の『華夷譯語』は、いわゆる丁種本で、乾隆15年（1750年）に編纂されたものです。最近の研究により、本学所蔵のものは当時つくられた原本そのものであり、極めて資料的価値が高いことがわかっています。

本書は、松香堂書店のウェブサイトで購入が可能です。（<http://www.nacos.com/shokado/>）

本叢書の次巻以降の刊行については、各研究成果の公開時期をはかり、適宜行う予定です。



研 究 所 報 第 67 号

2015年12月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2015 Otani University Shin Buddhist Comprehensive  
Research Institute